

文臭だ。蘭外は外國文學を輸入したに過ぎないではないか。樽牛に至つては、諸君よろしく現代を超越すべしなんて、中學生の口吻よろしく、甘いもんだ。美妙齋には口語體創始の功はあるが、未完成で終つた。其の外、露伴、紅葉の流行見だつて、西鶴の受け賣りを見物の目を巧く眩ましてゐる手品師のやうなものだ。洗ひざらし見て、どこに明治らしい織目があるか。藝が巧みだといふのと、時代性の特色といふのは違ふのだ。柳浪、眉山、緑雨、一葉、二葉亭、人材は雲の如し、と言つていゝかも知れぬが、たゞ紅紫妍を競ふ類で、見た目には華やかであり、惚れ／＼させもする。丁度錦繪の美人見たいなもの、恍惚と見ほれさせても、現し身の我々には、物足らないのと同じだ。肉に骨に胸に食ひ込むものがないのだ。寫生文は、やがてさういふ要求を充すものとしての礎石となるのだ。

世間もさすがに、徳川文學、江戸料理のお餘りでは承知しなくなつたと見え、自然主義なんて、妙にエロ的な、暴露的な、今までの綺麗事でない一派が擡頭しかけてゐる。が、自然主義といふ名からして、既に我々の寫生主義の後塵を拜してゐるぢやないか。さうしてそれら新人輩が、黙つて我々の寫生文を失敬してゐることよ。するゝとも横着とも、別に咎め立てしようとも思はないが、一言降参した位の聲名はあつていゝ筈だ。我々は小グループの長屋住居のやうでも、街頭には自然主義の鳴物入りが踊つてやらうといふのだ。宣傳はチンドン屋に任せておけばいゝ。指導者としての我々は、帷幄に在つて、徐ろに後事を策せねばならない。

こんな自賛と氣焰は、文章熱の高まつた四方太を中心にして、寄ると觸ると、我々の間に沸騰したものだ。そ

こへ、鼠骨の「新囚人」などが新たな養を投げて、少々たるみを覺えた俳句熱を壓倒せんす勢ひになつた。「ほとゝぎす」三卷十二號——卅三年九月——の子規の書いた消息に「先日拙宅に於て山會なる者を相催し候」とあるから、それが所謂山會の第一回であつたと見える。爾後毎月一回子規の宅に開く慣例にして、俳人歌人打つて一丸とした新たな會合となつた。

山會とは文章會のニククネームともいふべきもので、當日銘々の文章を持ち寄り、作者自ら朗讀し、其の批判によつて、大いに寫生文の爲めに氣を吐かうといふのだつた。恐らく子規と四方太あたりから出た説であらうが、いくら寫生文でも、たゞ觸目の光景や事實の漫然たる記録では文章と言ひ難い。文章には文勢も文脈も必要であるが、肝要なのは、其の山だ。つまり層々叙し來つた感興のクライマックスが光らねばならぬ。線描で書いて見ても、海鼠のやうな起伏も何もない、ノッペラボウでは、感興のクライマックスがない。最初は富士の裾野のやうに地面から低く、追ひ／＼高まつて往つて、さうして其の頂きに達する。其の頂きの餘勢が又た段々低まつて行く、さういふ山の恰好は、見てもすつきりして形態美が整つてゐる。文章もさうありたい。幾多の除外例はあるとしても、美しい山の姿は、まア大體さう言つた形だ。といふので山會の名が生れたのだ。

我々の間に生れた「月並」といふ言葉も、其の後一般化して、今日の通語にもなつてゐるが、固とお互ひの符號同前で、簡単な一語が、よく複雑な長口舌の代辯をしてくれたものだ。「山」の一語も、月並に次ぐ我々間の通語で、山があり過ぎるとか、山が通俗だとか、世間の文章小説類の批判にも大抵山の一語で終始した。

其の第一回山會の状況につき、子規の消息は簡にして要を盡してゐる。

……試みに其山の處を一口言はんに、虚子君のは、ある山の中で旅の夕方路を急いでゐると何處やらで、パンと鐘の音がした、尋ねて往つて見ると、坊サンと鐘つき堂が立つてゐた、其坊サンが鐘つき堂を廻るのが非常にのろくて日が暮れた、といふやうな事に候、四方太君のは、蝸賣の籠の中の蝸が舌を出しながら町を視察するといふので、交番の前から若竹の寄席を横に見てこちらへ來ると、赤いインキと黒いインキを掲げた法學生に逢うた、といふやうな事に候、次に碧梧桐氏のは、青丹よし奈良道で、さにつらふ吾妹子が、あの黄色な花がお前の好きなカボチャだよ、と教へる處など大當り候、稻が田に生えて、汽車が四條畷にとまつて、住吉の祭にお前が叔父さんの單衣を着た、などいづれもなか／＼の事に御座候。

大分樂屋落ちで、傍觀者に興味はないかも知れぬが、當時のことを思ふと、今でもヒヤリとする程、私には記憶の新たなるものがある。

記者生活をしてゐた私は、新聞に書くもので一かどの筆を持つてゐると思ひながら、寫生文となると、勝手に違ふせいか、いつも冗文冗長、アクの抜けないへまな筆が走つて、自分で読みながら、途中で読み切れないほど恥かしくなつてしまふ例だつた。この第一回は、何か是非書いて往かなければならないセツバ詰つた氣持で、私の妻になる月兎の妹と奈良邊を散歩かた／＼半日歩いた實際を綴つて見たのだが、皆に冷笑される前に、もう自分で愛想が盡きてゐた。其の時の文章はいづれも落第で、「ほととぎす」へは發表されなかつたが、私のへま文が何か地方雜誌にでも出たのか、鳴雪からは、其の後「色男には何がなる、アノ誰がなると言はないで、何が

といふ處が山でやす」など、随分手放しでひやかされた。

自分はなんでこんなに文章のアクが抜けないのか。其の點我々仲間、比較にならないほど、もう或る境地に達してゐる。今更でもない、自分のヤクザさが腹立たしくなる、とつく／＼自分を省みたものだ。

かういふ自己否定も、其の後何かの役には立つてゐると思ふ。

その年の十月、根岸庵の雞頭を倒した大あらしの時、下宿を出て、暴風にさいなまれてゐる街上の光景を仔細に見て來た文章は、宿病であるアクを抜くに努めたつもりであつたが、山會席上では一向に問題にならなかつた。で、これも落第といふので、静岡から出てゐた地方雜誌「芙蓉」に送つてしまつた。

「ほととぎす」の編輯で少々材料が足りないといふので、あの暴風文を入れようとなつたが、私はもう手正にないと答へた。さうかな、と言つた子規の顔には失望でもない拍子ぬけの色。動いた。さうだつたのか、私は其の顔に走つた瞬間の閃めきに、得も言はれぬ満足を感じたことすらがある。

何を言つても、當時の我々には、どこまで往つても、とゞまらうとしない進取氣分が横溢してゐた。内幕話をすれば、心細いうら恥かしい脱線もあるが、それは餘りに先きを急ぐ失敗なので、其の蹉跌は却つて我々の勇氣を鼓舞する叱咤の鞭となつた。

三十四五年を隔てた今日から見れば、子規の文章だつて、さう完璧であるとは言へない。可なり街氣もあれば、生硬なところもある。子規だつて、我輩も愚圖々々してはをれない、後の雁が先きに立つ、と言つた反省を

餘儀なくしたこともあるだらう。そこが我々仲間の一番尊い結びつきでもあつたのだ。

十八 神田猿樂町

大阪で私の結婚式を挙げたのは明治三十三年十月二十一日だ。媒妁兼親戚ではない友人總代で、墨水が何もかもやつてくれた。すぐ歸京して、神田猿樂町二十一番地に、始めて一軒の主人となつた。すぐ裏が竹冷宗匠の邸宅、右が家主、左が下宿屋、向ひが近藤といふ銀行員、家賃四圓、敷金二ヶ月分。當時再び京華日報に復歸しての新聞記者、月給三十圓位。毎月金が足らなくては、七つ屋通ひと言つた細々暮し。それでも毎月の例會に二十名内外の人が寄つた。一體どこへそんな澤山な人がはいつたのか、一寸不思議な位。

早速根岸へ報告に行くと、思ひもよらないことは、隣の下宿屋尾谷といふのは、曾て子規が大學豫備門時代に、しばらく下宿してゐた古巢だといふのだつた。竹冷宗匠大邸宅の物置めいてゐたのが、餘りいゝ心持でなく、早速どこかへ引越す豫定であつたが、子規の古巢に隣るといふのは何かの因縁、とそこに腰を据ゑることにしてしまつた。

尾谷といふ下宿がまた現存してゐる話から、豫備門時代の在りし昔を想ひ起すといふより、足腰の丈夫であつた健康時代を、久しぶりに回想せしめる種となつたらしい。

上京後一時居候をしてゐた藤野も、猿樂町に住んでゐたし、友人の清水が脚氣で死んだのも、同じ猿樂町の下

宿であつた。秋山、柳原、井林、菊池等同郷異郷の同期生と往來したのは其の尾谷であると、噴飯事、哄笑事、貧窮事、とり交せて、何くれと媿々話は盡きなかつた。

三十四年一月四日附、菊池仙湖宛の手紙にも「河東碧梧桐は昨年未結婚猿樂町二十一番地に住居中候」と書き出して

……猿樂町廿一番地とは猶貴兄の御記憶に残り居り候哉如何尾谷といふ下宿屋今も在りて……貴兄は何か少年と同居、小生は大井といふ我儘者と同居致居候船焼鱈鮓は毎夜格子の外に来て荷をおろしたる事も有之候貴兄が石井等と鮫汁を食らうとする途端小生が喚付たる事も有之候……

など如何にも突然らしく舊事をあばいてゐる。子規を世話したといふ藤野老刀自の想ひ出話をきいても、無精者で大食で、茶目でありながら、常に草双紙を読み耽つてゐたといふ。下宿青年の放縱生活は、いづれも似たり寄つたり、子規はむしろ普通水準よりも平凡に近い、何ら逸事奇行の無かつた方であらうと思ふ。よし目下のやうに、文筆に追はれ、病魔と戦ふに寧日のない、苦しい日を送つてゐなくとも、さまで想ひ起すほどの舊事もなかつたであらうが、私の假寓が偶然にも、將に消滅しかけてゐた古い幻影を新たに彷彿せしめることになつた。

同じ仙湖宛の末文に

……小生近時の衰弱は身體と共に精神上に及び言語道斷の事に候體が病むとて泣き昔を想うて泣き未來を想うて泣く或時は死ぬるのがいやで泣き或時は死にたくて泣く併し泣きながら猶大食致居候……

と書いてゐる。恐らくさる昔を呼び起すきつかけが久しく無かつた際であつたから、近頃珍らしい病床異風景として、舊知古友のあの顔この顔、果ては破れ袴ちび下駄までが、そこらに出没明滅したのであらう。さうして嬉しかりしをかかりし、悲しく恨めしかりし閑葛藤的な夢を追うたのであらう。

子規が餘り興に乗つた話をするので、不用意な一些事が、ほんの暫らくでも、子規の病苦を忘れさせた、功績の偉大なのを妨かに喜ぶのであつたが、それと同時に、もう先きの短い老人のやうに、過去の回想に餘りに興味を持ち過ぎる、もう長いことはない、と言つた悲しさを咬られもするのだつた。

それかあらぬか、私はそれから一年経つて、子規の病側を守る意味で、根岸庵近くに引越した、家に移るに、私が最も手軽な状態にあつたからだ。

十九 庭

「庭」といふ短文に子規自ら其の庭のことを書いてゐる。こゝへ引越した當時は、二三本の立木しか無かつたのを、追ひ／＼草木を植ゑ足して、一時は裏門へ水汲みに行く小徑の外、足ぶみも出来ない位茂つてゐた。

我々の印象に残つてゐる庭は、一面萩の茂つてゐる頃で、背丈にも餘る高さに咲き亂れた美しさは、来る度に目新しかつた。殊に其の濃い赤さが、仙臺の下宿にあつた萩を偲ばしめて、一寸今昔の感をそよるのであつた。

子規が自ら歎をとつた例もないであらうから、植込みの趣向は、先づ母堂と令妹の合議であつた。こゝへ何を植ゑよう、この邊がいゝだらうと、失禮ながらさまでの豫定も工風もなかつた、素人植木屋の考案が、雜然として庭らしくない庭に出来上つたのだ。

そんなに植ゑたつもりでもなかつた萩が、馬鹿にのさばつて、初めから計畫してやつたやうに、萩だらけになつたのだ。一層外の草なんか引き捨てゝしまつて、立木も垣も、萩で埋まる、縁側へも枝垂れかゝる、そんなにしたら、とも言つた。

すつと前は徳川家、後は前田家のお下屋敷、來歴が堂々たるものであつたせいか、土まで肥えてゐる？、何を植ゑても、すぐ堂々と育つのであつた。

雪舟の作つた庭、遠州の考案した邸園、そんなものが、どういふ結構か、どれほど美術的なものか知らない。やるならウンと金と努力と時間を惜まずにやつてもいゝが、なまじつかな細工や、常緑樹と踏石と燈籠で、へい庭でござい、といふ紋切型も御免だ。まアやり放しにしておいた方が、それが理想的であるなしは別として、第一に我々の好きな自然的なのだ。育つものは育つ、伸びるものは伸びる、蔓るものは蔓る、そこらにも生存競争のあるがまゝに、下手な干渉はしないのだ。自然の姿と匂ひ、そこに人間臭の交らないだけでも、我慢が出来るといふものだ。イヤ、自然に任せておくと、又たいろ／＼の變化のあるものだ。

萩が散つてしまふと、今度は雞頭だ。萩は物ごしに一寸色氣のある、何處か淋しい機屋の娘と言つた恰好だが、雞頭は大びらに乳でも出してゐさうな、百姓の若女房と言つた趣がある。背丈の低い、冠だけが馬鹿に大きい、鉢植にでもしたい黄交りの雞頭が、世間にはうけてゐるやうだが、萩がノサばるに抵抗するつもりなのか、こゝのは馬鹿にノツボだ。さうして冠の花も、丸髻の極大か圖抜け位膨れ上つてゐる。ノツボな雞頭は、追ひ追ひ花が小さくなつて、枝が澤山になつて、縁日のお蠟燭のやうになる、それは花の退化作用を示すものなのだ、一向そんなになりさうな形勢もないテ。それに今一つ異様なことは、秋深く霜じむ頃になるほど、花の色が濃く鮮やかになることだ。大方の其の葉がぼろ／＼枯れ萎びるにつれて、いよ／＼花の赤さは磨きがかゝつて来る。紅や胭脂のそんな毒々しい交り氣の多い色ぢやない。透明に澄んで、何かしら眼にしみるやうに氣高いのだ。赤といふと、幼稚な、原始的な、でなくば卑猥な低級な色のやうにいふが、それは大間違ひだ。初冬の晴

れ上つた空が、最もいゝ背景ではあるが、それでなくとも、この雞頭の眞紅に對しては、誰でもが打たれる。もう三四日もすれば、一度にクタククになつて、見るかげもなく霜にやられてしまふ際まで、肅然として其の品位を保つてゐるのだ。誰かゞさう言つた、世には主人に忠實な犬を忠犬で持て囃す例もあるが、この雞頭は、病人の爲めに、いつまでも頑張つてる、正に忠雞頭といふべしだと。他の一人がさう言つた、こんな背丈の伸びた鶴首のやうな奴も少ないが、病人が毎日どうしてゐるかゞ氣になり、又た寝ながらの病人にも是非見て貰ひたい一心で、首を伸ばし／＼したせいなんだよと。

子規は、もう萩にも飽いた、すつかり掘り捨て、一面干瓢でも植ゑるか、と言つたともいふが、そんな殊更な氣紛れが實現しなくてよかつた。萩の家、雞頭庵、そんな庵號も下されないが、どうといふことなしに、子規庵にふさはしいものと思はれてならない。あの物ごし、あの色、それらが再び蘇らなくとも、それらはいつまでも子規庵の花であつて欲しい。

随分不恰好なイヤなものだと思つたのは、大きな金網の鳥籠だつた。病室に近く、座敷からも半分位見えてゐた。この金網を貰ふ爲めに、淺井忠だの不折だの、思ひもつかない人を煩はして、又た思ひもつかない銀行の重役さんと交渉したやうな話も、我々を驚かした。随分手間のかゝつた金網だとは思つたが、小鳥の啼きごゑでも聽いてをればといふ病人の希望なら致方がない。が、妙なもので、やり放しの小庭でありながら、其の金屬性のものが、どこか不釣合で、風致を損する鮮少でなかつた。いつかの蕪村忌に、紅緑が熊と其の金網の蔭に坐を占

めたなど、殊にイヤだつた。

紅雀、ジャガタラ、四十雀、そんな小鳥が雜然と網の中を飛び廻つて、チー／＼、グツ／＼、餘りいゝ聲でもなくごつちやに啼いてゐた。それも自然の音楽、可愛くもないではなかつたが、どうも萩や雞頭のやうに、主人の目を樂ましめる程、耳を樂ませるとは思へなかつた。餌を入れてやる、巢をこしらへてやる、却つて家人の手を煩はす厄介物ではなかつたか。せめて母堂や令妹のお慰みにでもなつてゐれば、とそんな氣もするのだつた。

「少々やかましくないかな

」さうよなア。

子規は生返事をしたゞけであつたが、そんなことを言つたのが鏡をなして、小鳥共はいつか、推參罷りならぬ、とお拂箱になつてしまつた。さうして、其の籠の上へ、大きく棚を作らせて糸瓜を植ゑることになつた。が、さうなつて尙更、金網が邪魔になつた。大きいので、動かすことも仕舞ひ込むことも出来ない。糸瓜が棚からぶら下がつても、金網に引つかゝる、殺風景極まつてゐた。そんな爲めでもあらう、金網は其の後病室から見えない、便所の方へ追ひやられてゐた。

金網の向ふに、實に伸びのいゝ薄の一かたまりがあつた。何といふ種類か知らないが、穂も出ない前から、六七尺の高さに伸び上つてゐた。萩のやうに枝垂れないから、單り耿々然として庭全體を睥睨してゐた。其の時分の相撲取大砲が、群小を見下ろしてゐる恰好でもあつた。暑さうな、といふ形容詞を貰つて子規の墨繪の材料に

も選ばれてゐる。我々は却つて其の旺んな勢ひを、すが／＼しいとさへ思つてゐたのだ。何となく總てが病人化して、滅入りがちになつてゐる氣分を、どうかして引立てようとする、若者らしさもほのめいてゐたのだ。上野の山おろしの風に煽られて、葉がサラ／＼鳴る、何だか武者振ひでもしてゐるやうに思つたものだ。が、薄が餘りノサ張り過ぎるといふのであらう、出穂時分に、くる／＼縛られてしまつた。手も足も胴も一處に、まるでお仕置きに會ふ罪人のやうに。

「何だか薄が泣いてるやうぢやな。」

「なんぞな。」

「だつて、あんなにガンヂガラメに縛られたもんな。」

「ありやアお前、水汲みに行く邪魔になるからさ……お前も妙なことお言ふな。」

「アシヤア、あいつが好きでな。」

「ハ、ハ、ハ、お前にも似合はんことを。」

「似合はんで、アシだつて。」

「さう／＼、いつかの「根岸草廬記事」にも雞頭がどうやらいうた、そんなのがあつたな、ありやア拙かつたな。」

「アシには、どうも、何時に來て何を御馳走になつた、なんておきまりの寫生がいやだつたからよ。」

「何だつてお前、うまい文章なら何だつていゝぢやないか。」

「そりやアさうよ、まアさうお言ふなや、どうしてかう拙いのか、つく／＼いやになつとるのよ。」

「どうぞな、薄が泣いてる、それを山にすると、何か書けさうぢやな。」

私は名譽恢復の意味で、薄が泣いてる、を一篇の名文にするつもりで、起承轉結をうまく按排し、二三日筆を練つて見たが、山會で讀んで見よう勇氣を鼓舞する物にはならなかつた。薄にはもう顔が向けられなかつた。

薄の後ろに朝鮮松が右よりに、いくらかすまして立つてゐた。こいつは子規が引越して來たあがりに、大家さんが植えてくれた、三本の松の一つだ。地生えの椎なんかより主人には馴染の深い、こゝに移つてからの主人の總てを知つてゐる年功の木だ。根から五六本の幹にわかれて、饅頭の皮のやうに頭ばかり葉をもちや／＼させてゐる、日本の黒松などとは、全く如の違ふ松だ。朝鮮松といはれるせいでもあるまいが、至極冷淡な態度で、主人が病苦で泣かうと叫ぼうと、素知らぬふりしてゐる。丁度我々のやうに、何も彼も見馴れ聞き馴れてゐるので刺戟が鈍つてゐるのかも知れない。主人が繻帯代へで、痛い／＼言つてる時ですら、この邊をうろついてゐる野良猫を、肩のあたりに乗せて巫山戯たりしてゐる。もう七八年にもなるが、上へ伸びようとしなければ、横に擴がらうともしない。逡巡として、變化も進歩もない、俳人で言やア〇の仲間見たいだ、と主人もいつか思つたことがある。

松の右に梅、ゆすらなどあるが、更に注目に値ひしない存在だ。柿すきの主人の爲めに一本柿位はと思つてゐる。

たそれが、右隣の垣の上、椎の横に葉を見せて来た。隣のかこちらのか、これは又た所有の不判然な妙な具台に
仲びたものだ。よし所有権はこちらにあるにしても、桃栗三年柿八年、主人のナイフが其の皮に觸れる氣分を味
はふ時は、遺憾ながらまだ遠い。イヤさういふ時機はないかも知れぬ。

手水鉢の下に、いつでも秋になるとソーツと頭を出す秋海棠があつた。根は一本か二本位であつたが、みづみ
づした莖の太りかたと、にじんだやうな櫻緒色は、もう古ぼけた手水鉢の臺木に、いゝ裝飾をしたやうだつた。
いつ植ゑたともわからないが、ちやアんと時を違へずに芽立つて来る。主人「小園の記」を書いて、一筆のこの
秋海棠に及ぶものがない。「雨だれの秋海棠にかゝりけり」、そんな平凡な句では、承知しさうにもない素振りだ。
が、主人が繪筆を持つやうになつて、最初に寫生にかゝつたのが、この秋海棠であつた。以て汝も瞑すべしであ
らう。

庭を劃る杉の立木を越して、上野の森が、この寒園のいゝ配景をなしてゐる。少し氣取つたお客さんは、大
抵、ハ、アこゝは上野の森を庭園に眺めますねえ、と判こに捺したやうにいふ。まアさうでも言はなければ、通
俗にはどこと言つて譽めようのない庭なのだから致方がない。「しぐるゝや上野を虚子の來つゝあらん」、雨の日
は、殊更上野の森が、すつと庭近く押し寄せて來たかと思ふ程、仄暗く、じつとりと、森の氣分が頭上に覆ひか
ぶつた、心持のいゝ淋しさであつた。じつと耳を澄して、降り濺ぐ雨の音をきいてゐると、何かを囁くやうで
あり、獨りごとを呟くやうでもあつた。こんな日、誰か話にでも來てくれゝばいゝ、さぞ淋しがつてゐるだらう

思ひやりで、まア虚子でも來るだらうか、と襟のくしや／＼になつた羽織姿で、何か考へつゝ、森の半を浴びて
ゐる、あの虚子の姿を想ひ浮べるだけでも、心楽しく微笑まるゝのであつた。

虚子ばかりぢやない、誰でもが、根岸へ來るには、上野の山をトボ／＼歩いて越さねばならない。山下から博
物館の横、鶯谷を下りるか、動物園の前、音楽學校のうしろ、谷中の墓地へはいつて御院殿坂を下りるか、どち
らにしても、さう難有い道ではない。が、會が終つて後、二三人又は四五人連れで、明らかに談笑しつゝ歸つて
行く、夜更けて寂然たる森の光景を思ふと、却つてこの山あるが爲めの一添景のやうに思つて、時には其の仲間
に加はりたい氣もした。殊に月明の夜など、會主には興へられてゐない歸路といふ別な興味を持つ人々を羨しく
も思つた。酒飲みなら、歸りに一杯やらう樂みもある。腹が空いた連中には蕎麥屋もある。ひとり高樹寒月の景
のみならんやだ。いつも會主ばかり勤めて、參會者といふ氣輕な氣持に浸ることの出來なかつた子規でもあつ
た。けれども、雨、雪、風の日、ちびくれた足駄をひねくりながら、この山を越して來る事にさまでイヤな顔も
しない人々に對し、氣の毒なといふ感謝の念を忘れるやうな子規ではなかつた。

さう／＼、いつかの會の夜、根岸庵開闢以來の珍事として、參會のお客さんより會主の方が馬鹿に嬉しがつて
しまつたことがある。上野の森の如何にも根岸近くで、時鳥だといふ鳥の音が、二聲三聲つゞけてした、それが
鋭く爽やかに、珠をころばすやうでもあつた。最初一聲キャ／＼と啼いた時、誰しも時鳥かしら、と聞き耳を
立てた。つゞいてキャ／＼といふと、あら、と歎聲を軽く發したのは主人であつた。キャ／＼、少しの

間を置いての啼きつゞけを、大きく驚異の目を見張つて聞き入つたのも主人であつた。しばらく待つて、もう啼きやめたと思つた時、覺えず破顔微笑したのも主人であつた。我々健康者は、山里の朝霧の中でテッペンカケタカ、と絹を裂くやうに叫びつゞけるのを、もう幾度もきいて來た。あのキャッ／＼といふだけでも時鳥なのかと、少し疑つてゐた程だが、子規は、けふ位思はぬ御馳走をしたことはない、と無性に喜ぶのであつた。さうして、當夜の會よりも、時鳥の句に關する、古人の句の評論に花が咲いてしまつた。

二十室 内

明治三十三年十月十五日の一日記事——ほととぎす四巻二號——、子規身邊の描寫は實に精細を極めたもので、寫生道に準ずるとは言へ、隅から隅まで殆んど遺漏がないと言つてよい。この翌十一月からは、今までの根岸例會——句會歌會——を總て廢止しなければならぬほど病勢が進んでゐたにも關らず、どうしてあれだけ精密な觀察が出來たか、眞に驚く許りだ。原稿紙にして約二十枚はあると思ふが、それを亦た腹這ひになりながら、よく書き了せたものだ。昔からよく一字一涙などといふがそれは頭の中で文字を練る氣分だけのものだ。苦心慘瘡の形容詞だ。子規のは、頭で文句を考へるのは無論だが、筆を持つ身體が正しい位置を得ないでゐる。考へたり、練つたりしてゐる中に、腕も痺れて來る。指もだるくなつて來る。精神的にも肉體的にも、文字通り一字一涙なのだ。が、それも永くはつゞかず、翌三十四年二月には、自ら筆を執ることが出來ず、「くだもの」といふ一篇も、たしか私が口述筆記をしたほどだ。

右の一日記事中に、床の間の什物を叙して「先づ眞中に、極めてきたなき紙表装の墨作の大幅を掛けあり……余が家外に藏幅なければ三年経ても五年経ても床の間の正面はいつも此の古びたる竹なり」と藏澤の竹を點出してゐる。松山藩の代官からお物頭までを勤めた吉田久太夫の事跡は當時まださほど判然してゐなかつたやうだ。

蕪村と略ぼ同時代の人ではあるが、一生國外にも出ず、又た畫家として立つた人でもなかつた。眞に其の餘技の墨竹が、凡そ竹の繪として古今の何人にも超越してゐる高邁さを、其の後十餘年経つて、我々は始めて發見したのであつた。其の因縁も、この子規庵の古ぼけた全紙の一幅に由來してゐる。どうしてそれが子規庵にあつたのか、傳來はきゝ漏らした。が、松山の士分の家には、大抵藏澤の竹と名づけられる物が、襖や屏風や掛物に遣つてゐた。別に畫代をとるのでもなければ、氣が向けば誰にでも書いてやつた、それが各家々に分配されたものらしい。子規庵のも、恐らく昔から正岡家に持ち傳へられたものであらう。外に藏幅が無いから掛けたやうなものの、それに愛惜を感じるやうになつたのは、不折、爲山などの西洋畫家が、空想の竹でなく、寫生の竹であると激賞して以來のことだ。其の竹に何らの興味も見出してゐなかつた當時の我々は、子規の説明によつて、どうやら其の面白さが呑み込めた程だつた。

床の間の一幅によつて、其の家、其の主人の趣味性の一斑が推想されるなら、子規庵の藏澤は、正にお誂へ向きに出來てゐた。竹の色も地の汚れた色と融け合つて、一見掘へ處のないやうな繪でありながら、どこかに偉大さがあり、高朗な超脱味があり、主人の心境と操守を代辯してゐるのであつた。私は其の後、藏澤研究に没頭して、多少得る處があつた。それを子規に報告することの出來なかつた憾みを今だに抱いてゐる。

其の床の間には抹茶道具の箱、花瓶、剝製の鳥など雜然と置いてある中に、子規自刻の塑像、其の臺用卓子などがごた／＼してゐる。いつ來ても、大抵そこらの様子に、大した異變はない。時鳥や翡翠らしい鳥の剝製の

ど、病氣慰問に人から贈られた物、其の厚志に對して、捨てゝもしまはれず、さりとして仕舞ひ込んで置く押入れの餘地もない。仕方なしソツとそこらに寄せ集めてある。ゴタ／＼してゐようと、別に片付けやうはなかつた。

子規自刻の自像は、本人多少得意のやうでもあつたが、其の畫ほどはうけなかつた。手さきの器用な人でも、泥だけはさう容易くこねられなかつたものと見える。素人細工の面白と言つた、下手な感じも出てゐなかつた。たゞゴツ／＼したグロテスクな土の塊まりでもあつた。が、さういふ意外な手さびが、たゞ病閑の遊びといふに過ぎなかつたであらうか。遊びにしては、少し變り過ぎてゐるやうである。尤も歌詠みで鑄物師の秀眞が、始終歌の會ばかりでなく、我が師として日夕親炙してゐたから、萬更縁故のないわけではなかつた。鑄物師の手工日記としての秀眞の作が、ひどく氣に入つたこともあつた。それに誘惑を感じたとしても、茶托とか分鎖とか、鑄物入門の工程は、もつと手近かな物から始まりさうである。いきなり、病顔を鏡に寫しての自像寫生、そこに思ひつくのは、入門一年生のつもりでない、もつと外に意味があるやうである。子規は何も、鑄物の手習をする豫行演習をしたのではなかつた。始めから自像を作る、それだけの實演行動であつたのだ。自像さへ作つてしまへば、もう泥にも何にも一切の用はなかつたのだ。

では、どうして出來さうにもない塑像など、自分で作らうとしたかの疑問が當然起るであらう。其の疑問を解く前に、先づ注意したいのは、其の出來な自刻を、何とかして金に鑄てもらひたい、と秀眞に再三依頼した事

實のあることだ。中がガラン洞になつてゐなければ、鑄型にならないと断はられて、可なり失望もしてゐる。自分に似て居るかどうかもわからないながら、それを永久に保存したい意思で、微びたり壊れたりしない青銅にでもして置きたいといふのは、たゞの氣紛れな遊びでないことを十分裏書きしてゐないだらうか。

子規は、身分に關する總てのことを、手づから整理し選定して置きたい、可なり強い衝動を持つてゐた。句でも歌でも、出来る事なら、隨筆でも小説でも、其の他のあらゆる述作でも捨つべきは捨て、取るべきは取る。清濁混淆したもので投げ出されてゐるのが氣になる潔癖性でもあつた。早く言へば、自ら信するものゝみを保存して、其の他は總て焼き捨てたくもあつたのだ。名を惜む意味が全然無かつたとは言へないであらう。我々のやうな後輩が、意に滿たない句集や歌集を作る不愉快さを望見してゐたでもあらう。殊に裁斷者のない、我々の區々の我意主張が、子規の遺業にも累ひするであらう、必至の勢ひをも洞察してゐたであらう。が、それよりも、身を綺麗さつぱりして置く、一日風呂にはいらなければ氣持がわるい、と言つた本能性と同時に習慣性が、殆んど無意識に働いてゐたのだ。總ての句を整理して「寒山落木」を作り、更に「寒山落木」から抜萃して「巖祭書屋俳句帖抄」を編んだのにも見ても、身邊清掃の意味は明らかに酌まれる。「竹の里歌」を淨書したのも、それで満足してゐたのではない。更に精選した第二の「竹の里歌」の出来る準備であつたとも見られる。この潔癖性本能が、自作自便にまで波及したのだ。若し氣紛れといふなら、到底成功しさうにもない門外のことまで、手を出したといふ、たゞそれだけのことだ。子規の本能から言へば、常識的なデス・マスクなんかより、グロでも下手

でもいゝ、自分の立體像まで整理して置きたかつたのだ。「死後」と題する文章を見てもわかる。墓志銘を作り、墓石まで限定して、其の墓所の整理までしてゐる子規なのである。

さう言へば、子規といふ人は、如何にも自信の強かつた人だ。總ての他人が、馬鹿に見えて堪らなかつた人だ。健康のいゝ頃は、多少の中和性を以て、左程に露骨でもなかつたが、病勢の進むにつれ、頭腦は明澈になつて、他人の馬鹿さが、愈々度を加へるやうであつた。いつか枕頭に侍してゐた時、かねて疑問であつた人生の問題、哲學の問題、文藝の問題、それらが實に明白に解決した、が、この重體では、もう口にも筆にもそれを發表する能力がない、實の持ち腐れである、と力をこめて言つたことがある。歿前一ヶ月程前のことである。時代に一エポックを作るやうな、偉大な能力の人には有り勝ちなことではあらうが――。

右の一日記事には漏れてゐるが、この前後、支那から、切れ地に書いたエタイの知れない曼陀羅が来る、禪坊主の持つ、長い毛の垂れた拂子がとゞく。義和團事件で渡支した肋骨天津市長からは、子規庵一杯にひろがるやうな、傘ともつかない幕ともつかないやうなベラボウなものも贈られた。それを大勢がひろげて見て、今更支那の老大きを讚嘆したりした。

病室は六疊、客座敷は八疊、玄關は二疊の、言はず客膝の蝸廬ではあつたが、それが吞吐した名物、珍物、奇物、異物、唐物、子規なればこそであつた。

二十一月 並論

此頃の句には、不用意な月並が多いと、子規自ら其の警告を書いたのは、卅三年の七月であつた。大衆的即月並といふ一律論も成立しないであらうが、俳人の殖へるにつれて、模倣が模倣を生み、暗合が明合となるのは、大勢の推移上已むを得ない。陳腐と踏襲は、絶対に咎めない、と自ら陳腐黨の旗がしらを以て任じてゐた鳴雪ですら、この前後、「ほととぎす」募集句の類句の多いのに悲鳴をあげてゐる。

子規のあげた

二日 灸弟に顔を見られけり

抱き上げて孫にそゝがす甘茶かな

薄物に風の離れぬ衣桁かな

これらの三句が月並であるといふ以外、若し例示しようとするれば、恐らくは當時の會報募集句中にも、其の數枚舉に違なかつたであらう。

其の外、募集句何に就いて、と其の選後の感想を書いて、投句者の注意を喚起してゐる子規の親切ぶりは、折角築きあげられた我黨の俳壇が、大衆化によつて潰がせんとする轉ばぬさきの杖を言つたのである。

殊に當時ほととぎすの副業として俳書の覆刻をした其の第一が「俳諧三佳書」——猿蓑、續明鴉、五車反古——、第二が「太祇」第三が「几童」、第四が「召波、樗良」と、天明陣總出の軍容を張つたのであるから、血のめぐりの早い青年達は、其の口吻を眞似るに急で、我々と同じく、其の眞諦を玩味するといふ落著きを知らなかつた。言はゞ生兵法が利剣を帯びたやうなもので、太祇調などと鼻高に自負してゐるものは、大抵自ら傷ついた月並に近いものが多かつた。

物の盛んなると衰へるとは紙一重の差だといふ、又た向上と墮落は隣同士だともいふ。大勢に釣られ、流行に棹さして、つひ有頂天になつてゐると、いつかあらぬ迷路に陥つてゐる。我々の俳句は、尙ほ勃興の途中に在ると思つてゐるにも關らず、既に墮落の魔影が付き纏つてゐる。こりやアうつかりしては居れん、と心切かに考へることもあつた。

翌卅四年三月、「日本」の俳句欄で

山吹やいくら折つても同じ枝

山吹や何がさはつて散りはじめ

子規

同

この二句がいたく私の眼にとまつた。子規は一般投句者の月並化を警告しながら、こんな作例を示すとは、甚しき矛盾だ。「ほととぎす」募集句の中に、これが交つてゐたとすれば、それは問題ではないであらう。が、苟くも子規御大の作として、麗々しく「日本」紙上に掲げられた以上は、其のまゝに看過されない。露骨に言つてし

まへば、二句とも極印つきの月並だ、といふので、私は直ぐ子規に手紙を書いて、教を乞ふといふより、むしろ詰問的な蕪辭を並べた。其の返答が同廿五日の「墨汁一滴」に出た。

が、月並でないといふ殆んど何らの理論もなく

二日灸和尚固より灸の得手

碧梧桐

草餅や子を世話になる人のもと

挿雲

手料理の大きな皿や洗ひ鯉

失名

などが却つて月並なのだ、と逆襲してゐるのに、私は甚だ慥らなかつた。何も二日灸の句が月並であるないの論ではない、山吹の句の是非如何が問題なのだ。それを回避してゐる論法は、甚だすしい。殊に私の二日灸は、例會の作か何かで、堂々と世に發表したものでなかつたのを摘出するなど、少々卑怯だとも言へる。

手紙など往復してゐるに堪へなくて、根岸へ直接談判に出かけた。其の結果が四月八日の「墨汁一滴」となり、洗ひ鯉」の句の手料理論として現はれた。が、山吹の句に就いては、何ら記すところはなかつた。面と向ふと、さうテキパキ議論も出来なかつたものと見える。

山吹の「いくら折つても同じ枝」は、山吹の枝を折る動作の具象化でなくて、さういふ動作を想像する抽象化である。或はさういふ實在の事實に無關係な、假設構想だといふ方が適切かも知れない。だから、山吹を手にしたまる程折つて、どれもこれも同じやうな枝だ、と其の形、又は姿に見入つてゐるやうな感情は更に現はれてゐな

い。私はそれがイヤなのだ。我々の寫生道から言つても聊か邪道だとも思ふのだ。この句が一體何を具象化するかと云へば、山吹の相似た、いくらか彎曲した枝ぶりでもなければ、地から生えた其の姿態でもない。又た枝を澤山折り持った人の容子でもない。それらを裏面から想像せしめる或る觀念的なものだ。其の觀念の中には、皮肉に言へば、山吹を愛する氣持が、それとなく含められてゐるかも知れない。さういふ抽象觀念以外、或る具象化したものを持たないのが、月並の常套手段なのではないか。若しこの句から、動作の具象化と感情の表面化が、假りにも享け容れられるといふのなら、それは又た別な議論になる。「何がさはつて散りはじめ」も、散りはじめた花の具象化より、山吹は散り易い花だといふ抽象觀念の方が強く響く。「何がさはつて」がこの場合に月並なのだ。

殊に子規の月並論は、月並宗匠のよく使ふ言葉であるから、といふ理論的には甚だ薄弱な根據もある。それは文藝の一般性に當て依る議論でなくて、たゞ子規一個の好惡の問題ではないか。さうして、お前らは月並がどんな言葉を使ひなれてゐるか知らない、といふのも少々高壓的だ。

尤も、其の時分から「日本」に發表される大部分の句に、何か慥らないものを感じてゐた。成るべく穩やかに、すら／＼と、言葉の工みを避けようとするのが、どれもこれも毒にも藥にもならない、噛みしめる味ひのないものになつてゐる。緩んでゐる感じだ。以前はよく其の斬新さに打たれるものがあつたが、近頃は又たかと思つて多量の場合が多い。子規も病勢の爲めに緊張味を缺くやうでは心細いことだ。

さういふ不平を抱いてゐた際だつたから、山吹の句が一層問題になつたのだ。不平の爆發といふ趣もあつた。が、其の不平が子規の解説によつて氷解しなかつたわけ、私の不満はやゝ内行的になつて、更に當時の傾向を批判的に見るやうになつた。

子規に對する畏敬崇拜の念は少しも渝らない。殊に病勢の日に／＼暮る容體は傷心の限りである。が、我々の生命である俳句の問題はそれとは別だ。子規の選に慄らない我々一個の管見は、俳道自然の推移として、已むを得ないことだ。子規が我々を手にかけて教育したのも、今日の我々を作る爲めだつたのだ、我々一個の存在を明らかにする爲めに。それをお座なりに秘し隠してをるのは、却つて子規の誠意に背くものだ。一つ大きく子規と衝突して、是非を争つて見ようか。私はそんな氣分で、思ひ悩む日もあつた。

つひ二三年前まで、子規盲従であつた私が、いつこんな獨得の管見を持つやうになつたのか。私にもそれはわからない。私はむしろ、こちらが變化したのでなくて、子規の方がどうかしてゐるのだと思つてゐた。明治三十年の俳句界を書いて、句界に流れてゐる微妙な底の流れに著眼するやうな、明敏な子規なら、今日私の抱いてゐる不平は、即ち子規の不平でなければならぬ筈だ。私から問題を提示しなくとも、更により以上の問題を見つけてゐなければならぬのだ。今日まで子規に頭の上らなかつたのは、私の直覺にも考察にもない問題を提示して、私の不感性を感性に衝撃してくれた、其の明朝高遠な眼識の爲めなのだ。事毎に我が首を開いてくれる難有さが身にしみてゐたからだ。が、近頃はさういふ脳天をどやしてくれるやうな刺戟に餘り浴しない。失禮な言ひ

分かは知れないが、病氣の爲めに、其の洞察力が蝕まれたのだ。もつと背筋にあたる問題を把握する明敏さが鈍つたのだ。でなければ、私のやうな粗雑な頭にさへ訴へる問題を等閑視してゐる理由はない。私はかうも思ふのだつた。

たとへば、「ほととぎす」四卷七號——卅四年四月——に虚子の書いた俳話「配合」に就いて、子規は

青麥の中のびたる杉菜かな

四方太

黄檗の貧乏寺や花御堂

同

かやうな句は一見平凡ではあるが、青麥と杉菜、貧乏寺と花御堂の配合が多少斬新など説いてゐる。虚子は其の説をきいて又た更に一隻眼を開いたと言つてゐる。私は一讀して何だつまらないとさへ思つた。句は材料の配合で生きる。強弱美醜、極端な配合もあれば、青藍赤紅、相似の配合もある。それを句作の一手段として考へたのは、まだ我々がヒョッコであつた前時代のことだ。寫生も何も、理論的には考察されなかつた昔の話だ。今更になつて、其の邊への逆戻りは片腹痛いとさへ思つた。「青麥の中に伸びたる」句其のものが、實景を注視しろと言つた、初學寫生の範圍を出でない入門作程度のものだ。それを「麥と杉菜」の配合で生きてゐる、それが斬新な配合であるとは、一體どういふことなのか。寫生の大道を濶歩してゐる今日の時代に、句中の材料を配合と見て、其の可否を批判する、一句の成立を機械化して見ることが果して正しいのか。「貧乏な黄檗寺や」に到つては、尙更ら論外だ。これでも句になつてゐるのか、これが明治三十四年の我黨の句なのか。加之、それが貧乏寺

と花御堂の配合で、物になつてゐるといふ。大體配合とは何ぞや、と聞き直つて承りたい位のものだ。私は少々
ちれ氣味にもならざるを得なかつた。

それと前後して「墨汁一滴」——五月二日——に「碧梧桐近時召波の句を讀んで三歎す……太祇蕪村一派の諸
家其の造詣の深さ測るべからざる者あり。曉菴蘭更白雄等の句遂に兒戯のみ」と随分思ひ切つた斷定が出た。次
で六月二日に「此頃碧梧桐の俳句一種の新調をなす……」の一項が現はれた。子規未だ死せずと言つたやうな、
心からの悦びは何も私自身が目標になつたからではない。それ程の慧眼を持つてゐる子規の心的英氣を讃仰した
のだ。にも關らず、なぜ配合論などで凡句の辯護をするやうな凡へドを演じるのか。それをエラーと見るの
は、餘りに子規を輕蔑したことになる。私には前後辻褃の合はない場合による別な頭の働きた、としか考へられ
なかつた。

第一回の俳談會といふのが、三十四年八月二十四日、根岸庵で開かれた。一時句會、歌會、蕪村句集論講會、
それら總ての會合を斷つてゐたが、矢張淋しいのだ。人戀しいのだ。と言つて大勢と句を闘はし、歌を論じたり
するの乙稱だ。頭にも氣にも障はらない手輕な會合といふので、自ら思ひついたらしい。前日の虛子庵例會の
席上へ子規の手紙がとどいた。俳談會なんて、又た叱られるのか位で出掛けたのだが、何より愉快であつたの
は、子規が案外な元氣で、例の茶目らしい警句を吐いたり、病床に釘づけになつてゐる大病人とは思はれない時
れやかさであつたことだ。

が、私の懷抱する不平は、さう理論だてゝ吐露する程明快なものでもなかつたが、其の席上で子規の作つた句
の評論には、多少の鋒銛がほのめいたとも思つてゐた。何でも初め問題を持つて來いと言ふのであつたが、誰も
持ち合せて來なかつた。で、子規が久しぶりに庭前五句を即席に作つた、それを議題としての衆議公論であつた
のだ。

夕顔の實をふくべとは昔かな	子規
夕月や糸瓜尻の花ながら	同
夕顔や糸瓜や同じ柵子どし	同
鄙の宿夕顔汁を喰はされし	同
夕貌の柵に糸瓜も下りけり	同

即吟とはいふものゝ、私は一見して感服もしなかつたし、中にはイヤだと思ふのさへあつた。「夕顔汁を喰はさ
れし」が就中イヤで拙いと思つた。それが「鄙の宿」では手品の種明し、理づめには協ふが、何の餘情も餘韻も
ない。これが虚子、四方太と私の間の議論になつてゐるところへ、子規が「ちやお前なら、夕顔汁も鄙の宿、と
言はぬと氣に入るまい」などゝ半覺を入れて皆で笑つた。そんな昔風な、遊び半分の句論をしてゐるのでない、
と思つてゐた私は甚だ不愉快だつた。だから「夕顔の柵に糸瓜も下りけり」なんて句は、どこがいゝのか僕には
わからない、と頭から突はねてしまつた。蕪村がどうの、召波、太祇がどうのと、元祿は無論、天明第一流の作

者を向ふに廻して、それと遜色のない、イヤそれ以上の收穫を得ようとしてゐる我々ではないか。夕顔の棚に糸瓜も下りけり」邊の「新俳句」以前の乳臭がとりきれないとは呆れたもんだ。私の不平は、更に現實性を段々に帯びて來た。

三十五年一月私が根岸へ引越した時、子規が「移居十首」を態々小切れに書いて喜んでくれたりしたが、側にをれば、自然顔を合はす機會が多く、話も時には私の不平に觸れなければならなくなつた。若し私の不平に對して、子規が眞向から鐵槌を下すやうであつたら、もう昔のやうに盲従もせず、泣寝入りにもならなかつた私は、或は正面衝突の已むない立場に追ひ詰められたかも知れなかつた。きのふの不平でなく、もう一年餘りも凝りに凝つた肚裡の磊塊なのだ。それだけ私は自信もあり熱もあつた。もう「新俳句」時代の老大家は、そろ／＼籠がゆるんで來たのだ、今後の道連れは新人青年だ、紫人、抱琴、癖三醉、碧童、淺茅、虹原、道三、やがて大成する麒麟兒、一時に雁行してゐるのではないか、さういつた後進に囑望する氣分も可なりに動いてゐた。

これと纏つて議論したこともなければ、又た其の結果としてどうといふ收穫もなかつたのだが、子規と私の間に自然に意見の疏通を見たものがあり、私の不平を或點まで肯定する默契もあつた。それは私が根岸に住んで、三日に一度は對談する機會を得た、彼此接近の賜物であつた。それ位は子規にも疾くにわかつてゐる筈だと信じてゐた。それがやゝ明らかになつた快感は、本統に私自身救はれたと思つた。月並論で衝突したことなど忘れたやうになつて、肺腑を吐露する對談は、日に／＼彼撃ち我鼓する底の興趣が湧いた。

それを單に子規と私の二人きりのものにして置くのは惜しい、イヤ勿體ない。廣く同人にも味はせたらいいだらう、といふのが「俳諧評判記」——ほと／＼ぎす五卷六號——であつた。子規と私の合作で、文章は私が書いた。

が、虚子は俳諧師四分七厘商賣人五分三厘とか、商賣に身が入つて句が下手になつたとか、青々は少々月並がわかりかけたとか、妙にひねくる時流の句を鳴雪も作るとか言つた、樂屋落ちである許りか人を侮蔑し毒づくやうなもの困るといふ非難が出て、もつといふ種が澤山とつておきになつてゐたにも關らず、一回切りで中止させられた。若し「評判記」がよくないといふなら、子規もまア同罪なんだ。横槍を入れられて可なり困つたらしい。さうして文責を私に歸して、「病牀苦語」——ほと／＼ぎす五卷八號——で、其の辯解をしなければならなくなつた。

評判記など書く書かないは、私に問題でなかつた。もつと婉曲に書けなかつたのを恥ぢ入つた位で、私は却つてノウ／＼してゐた。子規も言つてゐる通り、同人の悪口をいふのはよくないかも知れぬが、それによつて反省する所があれば、それでいゝのだ。反省を伴はない漫罵ではないと堅く信じてゐたからだ。

ともかく評判記といふ掉尾の山で、私の不平も一段落を告げた形であつた。私の意見が子規に裏書きされた、其の満足を胸に秘めて、大いに朗らかであつた。

二十二 人生觀

我々は子規に接する十餘年、未だ嘗て直接に、人生とは何ぞや、人間とは何か、宗教のいふ信仰解脱、さういふ人生觀めいた話、又た修養訓らしい説を一度も聴いたことがない。以心傳心、ただぼんやり自己に徹する哲學を持つてゐるのだらう、解脱超脱の境界に悟入してゐるのだらう位に思つてゐたゞけだ。

「病牀苦語」——ほととぎす五卷七、八號連載——は私が筆記したと記憶するが、其の時ゆくりなく、其の人生觀を聞くやうな氣がして、筆記しながら、我々には至つて珍らしいことのやうに思つた。「ほととぎす」の材料として話すのでなく、私に話してくれるものとして謹聴した。それは非無——曉鳥敏、眞宗の坊さん——の間に答へた一節である。

……この宇宙間には原因結果の關係といふ必然の眞理があつて、宇宙のものすべて固より吾々人間迄も、此眞理に支配せられてゐるやうに思ふだけのことである。それも理窟詰めに押詰められたならば、固より其極端に至つて答へに窮する事はきまつてゐるが、僕はたださういふ事が一番自分にわかり易いので勝手に信じてゐるまでの事である。併し宗教などと言ふやうに、此の世で善をすれば次の世で善報を受けるなどいふ因果説では無い。勿論今日の人間社會で善には善報ありといふやうな事は全く嘘ではないので、それも因果の一部には相違ないけれども、宇宙に行はれてゐる因果の道理は、單に倫理の上を支配するやうな簡單なるものではないので、一方には倫理上から或人に幸を興へるやうな筋道になつて居つても、亦た

他の方からは同人に不幸を興へるやうな因果の筋道になつてゐる事もあらう。まアさういふやうな理窟であるから、従つて僕は人間の意志の自由といふことを許さない。右へ行くも左へ行くも、手を動すも足を動すも皆な意志の自由ではなくて、矢張り或る原因から右に行かねばならぬやうに、又は左へ行かねばならぬやうに、又は手足を動かさねばならぬといふ必然の結果を生じたのである。さういふ次第であるから、若し人間の智慧が宇宙にある悉くの現象を一々に極め盡す事の出来るものであつたならば、未來の事でも判然わかつて仕舞ふ譯である。併しとてもさういふ事は出来る事ではなくて、只だ僅によく未來を想像する事が世の中に立つてエライと言はれてゐるのだ。併し其のエライといふ人も必然の結果で蒙り人に成つたとすれば、丁度人間世界にエライ人とエラクない人とあるのは、植物に高い木と低い木とがあり、動物に美しい鳥と醜い鳥とがあるのと同じことになつてしまふ……。

至極簡單な宿命説のやうであるが、宇宙の神祕が、解けない謎である以上、天とか神とか一つの假體を想像するやうに、宇宙の眞理と、因果關係を假想する、それから總ての自由意思を許さぬとまで斷定するには、そこまです考察探討する種々の徑路も曲折もあつたことであらう。自分の病氣も其の呵責も、因果關係から言へば、生れる前からさう約束されてゐたのだ、といふのが今日の安心立命の根據であるらしい。この根據だけなら我々にもわかる。いろ／＼考へた末が、こゝに落著く意味も、略ぼ了解される。たゞこの簡單な根據が、社會百般の事相に應じてどう働くか問題なのだ。人生觀といふものも、押し詰めた根據になれば、さうむづかしいものでも、こみ入つたものでもないのが本統らしい。

右の話の前に、自分の悟りについて「僕も昔は少し氣取つてをつた方で」と冒頭して、

……野心、氣取り、虚飾、空威張、凡そ是等のものは色氣と共に地を拂つてしまつた。昔自ら悟つたと思つて居たなどは甚だ愚の極であつたといふことがわかつた。今迄悟りと思つて居たことが、悟りでなかつたといふことを知つただけが寧ろ悟りに近づいた方かも知れん。さう思うて見ると悟りと氣取りと感違へして居る人が世の中にも澤山居る。そいつらを皆病氣に罹らせて自分のやうに却脱地獄の實苦にかけてやつたならば、いづれも皆尻尾を出して逃げ出す連中に相違ない。兎に角自分は餘りの苦みに天地も忘れ人間も忘れ野心も色氣も忘れて仕舞うて、もとの生れたまゝの裸體にかへりかけたのである……。

と言つてゐる。そこなのだ。子規の自ら悟つたと思つた心境も幾變遷してゐるのだ。悟つたやうな顔してゐる世間の奴等も、氣取りと感違へしてゐる生マなんだ。本統の悟りといふものが、どこにあるか、かうなるとわからなくなつてしまふのだ。子規も「悟りに近づいた」と言つて、本統に悟つたとは言ひ得ない、そこに難有いものがあるのぢやないか。

つまりは禪宗の公案のやうに、坐禪して考へたつて、本統の悟りが来るかどうか。眞に死生の問題、死生の問題といふより、あらゆる官能を苦めて、そこに悶絶するやうな痛苦を現實に嘗めて見なければなりやア、机上の悟りは何にもならないといふことになる。世間の生マ悟りの連中が、子規が死を恐れて苦悶するものと誤り、いろ／＼慰安方法など説いて来るのを、癪だと一喝するのも亦た已むを得ないのだ。中江兆民の「一年有半」を嘲笑する所以なのだ。「禪宗の悟りといふことは平氣で死ぬるといふことでなく、平氣で生きてゐるといふことだ」との新

たな解釋も、そこから生れるのだ。「あきらめるといふことは、大抵の人に出来る、あきらめる以上のことは、さう容易く出来ない」といふのも同じ根據からだ。「病人は病氣を樂むやうにならなければ生き甲斐がない」といひながら、「誰かこの苦を助けて呉れるものはあるまいか」「如何にして日を暮らすべきか」と悶へてゐる。其の矛盾のやうに見える、其の兩端を結びつける一つの根據も亦た外には見出されないのだ。古人の花鳥畫譜を飽かや眺める、枕頭の有りふれた團扇の畫模様を氣を引かれる、親しい友達と家計の苦しい話に興を催ふす、それらも悟りに近づいた一如の世界なのだ。

私は平生ぼんやりかう考へてゐた。普通の人なら、子規のやうな病苦に責められるれば、肉體がそれに抵抗し得なくなる前に、先づ精神が抵抗し得ないであらう。狼狽する、悲觀する、滅入る、茫然とする、もう何を考へることも、念ずることも出来なくなる。即ち精神的に先づ死んでしまふ。斷頭臺に引上げられた氣の弱い者は、首筋に水を滴しても、ガツクリ死ぬるといふ。精神的に死んでゐるから、呼吸のハツとした急迫にも、息は絶えてしまふのである。子規は、精神的に立派に生きてゐるから、肉體がもう抵抗し得ない極度に達しても、敢て倒れないのである。子規が昔から大食者で、御馳走論者で、丈夫な胃腸を持つてゐた、といふのも一部分の原因に數へられるであらうが、精神が死んでゐるのでは、そんなものは何の防ぎにも足りない。我々の子規に求めるのは、其の精神の生き方のコツ、其の根據がどこにあるのではないか。健康で居る時は、無造作に生きられるものゝやうに思つてゐるが、一朝病體となつて、先づ精神に大打撃を受けはしないか。立派に抵抗し得る腰が折れ

はしないか。其の用意の爲めに、子規自ら語らずとも、こちらで注意深く其の眞諦核心に觸るゝ機会を捕へるべきである、と。

が、考へても、人の胸中の祕密に尋ね入るなんてことが出来るわけのものではない。本人の無意識世界を、有意識に判定しようはない筈だ。結局、不明な子規のものを、こちらでかうと認識し解釋するまでのことになる。子規のものでなくて、それは碧梧桐のものだ。

さう言つた漢とした考察と疑問の前に、「病牀苦語」が現はれたのだ。それと「墨汁一滴」や「病牀六尺」や「ほととぎす」の消息やを綜合して、子規の精神に生きる、今までにない種明しを見たやうな氣になつたのだ。何やらわからないながら、其の匂ひを嗅いだ氣にもなつたのだ。

子規歿後、總ての支柱を奪ひ去られた孤獨のやうな自分を見出して、始めて強く人生問題を考へさせられ、自分の人生哲學の根據をどこに置くべきかに悩み、人生學一年生から、やゝ自得復習の黎明を感じた時、私は切にこの「病牀苦語」の當時を追想したものだ。若しあの時、私が多少とも人生學に頭を突込んでゐたとしたら、子規に問ふべく、又た其の判定を乞ふべく、多くの問題があつた筈だ。當時の私が、子規の眼に、どれほど薄ッペラに見えてゐたか、お恥かしいにも何にも、覺えず冷汗を流したものだつた。

二十三 風 板

根岸へ引越して、最初に私を驚かしたのは、或朝お律さんが、息せき切つて、兄が一寸来て下さいと呼びに來られたことだ。エツ、おわるいのですか、とお律さんの返事なんか耳にかけないで、飛んで來て見ると、更にそんな風でもない。朝から飛んだ御迷惑、と言ふ子規は今迄泣いてゐるのか、ハンカチで拭くやうにして鼻を鳴らしてゐる。二人とも洗濯に出たのか、井戸端で何やら話し合ふ聲がしてゐる。用があるので、思ひきり大きな聲を出して「オーイ」といくら呼んでも返事もしない。手を鳴らす、それでも聞えない。向ふの小さな話聲がきこえるのだから、こちらの大きい「オーイ」の聞えないわけではない。ヤケになつて怒鳴つたりわめいたりしたんで、やつと歸つて來た。それで今大喧嘩をしたんだ、と始終の話。其の餘憤未だ去らず、どうにも苦しいので、まアお前にでも來て貰へば、といふわけなのだ。急に容體悪化でなくて安心はしたものゝ、其の際私として扱むべき言葉のありやうはない。しばらくしてから、今朝の新聞の噂話位して、大分平和になつたのを見て歸つた。これから又た度々こんなことで呼び出されるだらう、さういふ場合に處する方策を講じねばならぬ、などと思つてゐたが、其の後一度とそんなことは無かつた。

私の「カナリヤ日記」——ほととぎす五卷七號——は、この事のあつた前後であつたと記憶する。カナリヤを

鳥籠とも一緒に貰つて歸る時の和やかな気分とは、可なりに違つた雰圍氣を感じるのでもあつた。

親子、兄弟、夫婦、さういふ分け隔てのない仲では、お互ひが大體に我儘なものだ。それで下らないことが言ひ合ひになり、それが嵩じて喧嘩にもなる。まして、子規の家庭のやうに水入らずの他人なし、永々の病氣で、誰でもが多少神経的になつてゐる。もつと度々泣いたり怒鳴つたり、火鉢がひつくりかへつたり、藥瓶が壊れたりする騒動が持ち上りさうだ。それが案外といふと禮を失するかも知れぬが、さういふドサクサがむしろ殆んどなかつたと言つていゝ。年齢の關係もあるだらうが、さすがに教養のある家庭人、私のやうな者が、其の仲裁にはひるなんて、無論そんな資格は毛頭なかつたのだ。この朝の大喧嘩といふのも、平生が餘り穩やか過ぎた比較の話で、一向問題にして考へる價値はないと思つた。が、多少氣になるのは、看病人の慰安策だ。病人の苦痛は、見るに見かねたところで、どうにも手の下しやうがない。其の苦しい病人と、或點まで歩調を合せて行かなければならない、健康な看病人の身にもなつて考へなければ、追ひ／＼には病人と共倒れといふことになつてしまふ。今お律さんの身體に故障が起つたのでは、それこそ萬事休すだ。それで思ひついたので、赤羽の土筆取りなのだ。

尤も昨三十四年の春、私夫婦が目黒邊を散策した際、時が早かつたせいもあるが、ホンの頭ばかりと言つた土筆を少し取つて來た。お國風の煮方をして、全部根岸へ持たせてやつた。これが大變お氣に召して、何年ぶりかにうまい物を食つた上、土筆とりの幼ないいろ／＼な想ひ出さへ浮んだ、と禮を言はれた。

「なアオイ、土筆はお前、あんなに短かう切りそろへんでもエ、のぞな」と子規が言つたので、私はつい噴き出してしまつた。體裁よく切り揃へたのではない、まだ若くて莖が伸びてゐなかつたのだ。

さういふ先例もあつたし、赤羽にいゝ土筆の網代もめつけてゐたのでお律さんをお誘ひしたのだ。松山の土筆とり——土筆をホシコと國でいふ——といふと、二三里の遠方へ行けばともかく、十歩に一本、百歩に二本と言つた具合で、まるで血眼で探がさねばならぬ。赤羽のは、本統に録で刈るほど林立してゐる、それも第一お律さんを驚かすであらう豫算だつた。晝過ぎから出掛けて四時頃まで、早目に引き上げて歸つたのだが、お律さんおひとりでも大風呂敷に包むほどあつた。案の通り、こんな土筆の大漁は生れて初めてだ、とお律さんを喜ばすこと一通りでなかつた。この事は連關して子規をも喜ばせ、「病牀苦語」の話ともなり、又た歌の連作ともなつた。これに味を占めて、翌日は又たおばさん——母堂——を向島の花見にお連れしたりした。其の頃私の姉で、裁縫の先生になる勉強に上京したのがある。ずつと以前松山で、おばさんの裁縫のお弟子に通つたお馴染でもあつたから、いゝ話の相手でもあり、萬事都合がよかつた。

そんなことをした間もなくであつた、病體が追ひ／＼危急に瀕するやうでもあり、誰か居て貰はぬと心細い風も見えるので、左千夫、虚子、義郎と私の四人が、毎日交替して半日位お伽をすることにきめた。

これが却々の大役で、枕元で紙をもしやくつても、少し大股に歩いて、頭にひゞくといふのだから、餘り大きな聲も出されず、勝手な口はきけず、それに始終病人の様子や氣の向き方を注意してゐなければならず、看病

人と立會人を兼ねたやうな、さうして、病人がまア此分なら眠れさうだ、と落著いて枕を引きよせるまで、立つことも歸ることも出来ない、こつちは半ば監禁でもされたやうな、氣苦勞な骨の折れるお伽だつた。

病人は大抵西枕、左を下に北向きに寝てゐるのであるから——左足と腰痛の具合で、さういふ寝方をするより外はなかつた——座敷の縁側の方へ我々お伽人が坐を占めると、いつでも病人の背部後頭部と、斜めに向き合ふ按排になる。だから話をするのでも、面と向き合つてゐないから幾分頼りない氣もするが、もう長いことそれに馴れてゐたから、聲のやりとりで調子もとれた。餘程氣に入つたか、又た氣に障つたか、或る特別な場合に、頭だけずらしてこちらを向ふとする時、あの切れ長がな右の眼尻が、瞳をグツとよせて一瞬閃めく例だつた。面白くをかしい話で、愉快に笑ふ時は、大抵さういふ眼づかひをして見せた。話手に敬意を表する意味もあるのであらうが、それ以外は、向ふむきながら、「ア、さうかな」と返事ばかりして、何だか山のない話だな、といふ風にハンカチをいちくつたり、瘦せた蒼白い手を伸して見たり、上げて見たりしてゐた。時には脱脂綿のアルコールで、指の垢をとつたりする事もあつた。

話の冒頭は先づ昨日の容體の善惡で、又た別な處に痛みが出来たとか、モヒがきいたとかきかなかつたとか、物が甘く食へないとか、嘔氣を催したとか、病人自らゆつくり靜かに話す間に、お律さんの口添へがあつたりした。毎月の「ほととぎす」の消息に、子規の病狀を報告したのは、もう一年も前からであるが、會へば先づかういふ病狀報告のあるのを綜合して書いたのだ。

病狀報告が一しきり済むと、お伽人の方が話題を提供する順序になるのだが、いきなり方角の違つた話もとつつきがわるく、それを話にするのに相當氣を揉む。話術の下手な私など、随分自分でちれつたい思ひをしたものだ。尤もけふはお伽當番といふ日ばかりでなく、これは話の種になると言つた話材を、平生からストックしておかなければ、お伽の役目に缺ける思ひで、寫生文でも書きに往つたやうに、よく話材を求めて歩きもしたのだ。が、妙な事には、けふは五つも六つもいゝ話材がある、少くも二時間や三時間は、これで持ちこたへる、と勇んで出掛けるのだが、次ぎ／＼話してゐると、呆氣なく盡きてしまふ。物の三十分も持たないで、自分で「なんだ」と思つたことも一再では無かつた。矢張身についたものでなければいけないのだ、急場の輸入ではダメなのだ、とそれから、もつ話材採集を思ひとまつてしまつた。

話材が盡きれば、しばらくだんまりで居ねばならないが、いつまでも黙つてゐるのは、尙ほつらい。すると病人の方から、何かしら話の端緒を見つけてくれる。場合によつては、病人の話が榮えて、そんなにしやべつてもいゝのか、とはら／＼させることもある。でなくとも、お伽人と病人がアベコベになつて、こつちが謹聴するやうになるのが、大抵の落ちだ。

話材と言つても、子規に緣故のある世間話が主で、根岸界隈の風聞、「日本」社員の消息、芝居話、寄席話、市區改正狀況、故郷松山の古今雜談、政界文界業界有名人士の逸話、流行物、時には多少の猥談にも渡る、大體その位の範圍を涉獵するのだが、世間見ずと言はうか、もう三十歳近くにもなつてゐた我々の話材の貧弱さは、實

際お話にならなかつた。

肩の凝らない、どこかユーモアのある話と言つても、時候やお天氣の挨拶見たいな、言はでもよき無内容で退屈なものも困る。女の井戸端會議の、襟垢の落ちる落ちないやうな些事末聞にも興が乗らない。何でもないやうで、聽者の聯想を喚び、それからそれと、連の糸のやうに話題が聯繋しつゝ變つて行くやうでなければ、單獨孤立の話は、長持がしない。耳が熱しない。さういふ話はさう澤山あるものでもないが、私はこのお伽によつて、話題と話術、殊に無聊を訴へてゐる病人に對するコツを覺えたやうな氣がした位だ。たとへば虚子が詳細に書いてゐる消息——ほととぎす四卷七號——に、平生動かない左足の曲りやうから、それが時々無意識の運動をする話になり、健康者の貧乏ゆるぎに移り、遂に寄宿舍全體を揺がす大貧乏ゆるぎに至る、子規虚子合作の話があるが、正に理想的の展開だと言つてよい。

話の醗酵して、芳烈に醗成するのは、どうも偶然的のやうだ。必然的に仕込んだのは、大抵飢不足で、中途に腐つてしまふ。

それはさうと、話題に苦しんだり、大に興に乗つたりする時は、根岸快晴なので、一朝、雨又は風となつてはお伽の厄日、居るにも居れず、立つに立たれず、何とも途方に暮れたものだ。つまり身體の痛み、寢具合の如何、モヒのきゝ按排、持ち越しの疲労、胃腸の加減、いろんな原因から、唸る、泣く、わめく、謔言をいふ、實に慘憺たる阿鼻叫喚の地獄の責苦を現出するのだ。それが段々嵩じて、天地晦冥暴風猛雨の大時化となつては、

何だかお伽のせいの中にも思はれて、骨も肉もコチ／＼に硬ばつてしまふ。が、お伽當番とあれば、イヤだからと言つて素氣なく逃げ出すことも出来ない。或る程度に風を見るまで、五臟六腑のちぎれる思ひで辛棒してゐねばならない。本統に、こちらにも病人と同じく、呵責の栲問をかけられてゐるのだ。時によると、病人の方で氣をきかして、いゝ加減に歸してくれる事があるが、さういふ時は、根岸庵の門を出ると、ア！と覺えず深い歎息の聲が、腹の底から出たものだ。さうして、年百年中、ア、いふ時化に難航をつゞけられてゐる、おばさんとお律さんの上を思つて、つひ目がしらが熱くなるのだつた。

だから病人の方でも豫め用意して、お伽の來る時間を計り、小便も大便も成るべくしておく、モヒも服用して、愉快に楽しく過ごさうと準備してゐるのだ。が、それが思ふやうにならない。さういふ厄日に出會つたのが災難とあきらめるより仕方がなかつた。

ともかく、無事に時間が來て、病人の夕飯となる。するとお伽にも御馳走が出る。御馳走と言つても、先づ豆腐汁に、井程度のもの。笹の雪や、鶯何亭といつた料理屋の一皿、又は其の頃根岸に始めて出來た西洋料理などが出るのは珍らしい方だつた。でも、この夕飯を頂戴するのが、一時自分の時間、幾分解放されたくつるぎを感じる時だつた。併し、お伽を始めた時分から、大分食欲も減じ、舌が鈍くなつて、甘味を感じない、それも當然の結果を來してゐるので、さうこちら許り甘さうに食ふわけにも行かず、孤鼠々々頂戴したものだ。

「ほととぎす」の消息によると、もう二月頃からモヒ一日に二回、時には三回服用するとあるから、お伽時分に

は、もう三回が通例になつてゐたかも知れぬ。西洋の狂人になつた文士の話などきくと、健康體でありながら、刺戟劑として多量のモヒを要求したといふ。其の外妖魔窟の女など、不當の金を拂つて、モヒを密輸入することだ。子規のモヒ服用が、飽和量に達してゐたかどうか知らぬが、あれ程の痛苦を堪へてゐた事から考へて、彼一流の自制心が、脱線的な服用を許さなかつたものと思ふ。若し私自身なら、一日五服でも六服でも、そんな事を省みてはゐないだらうと思つたりした。

歌詠みの義郎は、早くお伽を辭して、鼠骨が交替した。鼠骨の洒脱な話術は、子規を喜ばせて、お伽第一人の稱を得た。

やがて夏になつた。煽風機など無い時代だから、餘り人力を要しない、金のかゝらない、起風器はないだらうかゝ話になつた。根岸で有名な美術床屋——主人が固と浅井黙語らの友達であつたとかいふ——に、天井に吊した起風器があつて、弟子が垂れた紐を引くと、身體一面を大きな團扇で煽ぐやうに風が來た。横長い胴につけた、切れ地の垂れが前後に揺れる仕掛なのだ。この構造を大體見覚えて來て、竹の骨組から、ヒダのはいつた下の垂れまで、變テコな不恰好なものではあつたが、それをどうやら病室の天井にとりつけた。輪車を通した紐を、お律さんが病人の足もとに坐つて引いたり緩めたりされる。團扇で煽がせるやうなものぢやアないと、私の功名になつた。

子規はそれに「風板」の名を與へた。

病側お伽の延長であり、又た附録でもあつた。子規生前最後の奉仕であつたことを思うて、私はいつまでも、あの不細工不手際な風板の恰好を忘れることが出來ない。又た其の風板の風を浴びながら「病牀六尺」や、「ほととぎす」の原稿にと、何かを口授筆記させる時の、さも御機嫌らしい子規の様子を忘れる事が出來ない。

二十四 最後の二事業

「新俳句」に次いで第二次集「春夏秋冬」春の部は卅四年五月出版され、六月には其の再版を見る盛況であった。が、其の夏の部以下は容易に續刊されず、遂に子規歿後、虚子と私の共選で發行せねばならない運命となつた。

「新俳句」が幼稚で見るに堪へない、早く現役俳人の希望を充たす第二新俳句を作りたい渴望に對して、子規にも十分其の用意はあつた。卅三年頃から其の材料を整備しつゝ、先づこの邊で一旦打切つて第二新俳句を作らう、其の臺本は出來てゐた。俳人は新らしく増加する、句は日々の新聞、月々の雑誌を賑はしてゐる。どこかで打切つて、それ以後は第三次集の材料へと繰り越さなければならぬのは知れ切つてゐる。が、卅年以來餘り急劇な變化は、どこかで一度清算する其の機會をさへ與へない程だつた。

第二次集臺本は、子規のことであるから、新聞雑誌の材料の範圍も、主要なものに限定し、句の年代日時まで判然するやう、キチンとしたものが出來てゐた。初めは之を「新俳句」同様一冊に纏めるつもりであつたらしいが、出版の都合で分冊とすることになつた。又た仕事を切り詰めてすることの出來なかつた病人にとつて、其の方が好都合でもあつたのだ。

春の部が出版されて、一ト月経つか経たないに再版したといふのは、どれほど一般に第二次集が渴仰されてゐたかを裏書きするいゝ證左だ。初版どの位印刷したかを覺えないが、恐らく四五百部の程度であつたであらう。我々が子規歿後、其の臺本を見た時、これ程行き届いたものがありながら、どうして追ひかけて、夏、秋と選句に従事しなかつたかを不審に思つた程であつたが、當時の病苦の状態を想ひ起しては、又た更に黯然とするのだつた。

それまで子規に原稿の催促をする必要はなかつた。絶対になかつたと言つていゝであらう。いつでも先き／＼と趣向を凝らし、變化を考へて、向ふから原稿材料を都合のいゝやうに按排してくれるのだ。「まだ出來んのかな」と子規に催促されたことは幾度あつたか知れない。こちらから又た選刊するからと泣きついたことは一度もありはしない。總てを見透してゐる子規に、春の部の忽ち賣切れが、ピンと來てゐないわけではないのだ。それにも關らず、あとを續刊することが出來なかつた。それはむしろ我々が物足らなく思つたよりも、どれほど子規の方が齒痒く思つたことか。病苦の躍進と疲勞衰弱には、さすがの子規も匙を投げざるを得なかつたのだ。それだけ又た子規が内心焦燥を感じて、それとなく心を痛めてゐたかは、言はずとも明らかに推察されたのだ。催促をしようにも、催促すべき理由も間隙もなかつたのだ。

で、春の部の出たきり、「春夏秋冬」は齒ぬけの状態で、荏苒約半年を経過した。

私は今でもさう思ふ。固と／＼子規を中心に大黒柱にしてゐた當時の俳壇は、言はば一軒の家のやうなもの

で、軒の兩種から、縁の釘一本まで、何一つ子規の息のかゝらないものはないのだ、だから其の整理と清算は、當然其の責任中樞たる子規がすべきものであると。嚴密に言へば、當時の句には一つ／＼子規の選定眼が加はつてゐると言つていい。或る句に興味を感じて、それを紙上に發表する選定眼は、其の人限りのもので、他から窺ひ知ることの出来ない微妙なものだ。句の可否善惡をいふのではない。芭蕉の選定眼に成る「猿蓑」でも、梅室の選定眼に成る「方圓發句集」でも、若し他の選定眼を持つた者が其の衝に當つたとしたら、又た全く別な集になるべきなのだ。この意味に於て、子規の息のかゝつてゐる時代の句は、當然子規の選定眼によつて篩ひ分けられなければ、意義を生じないことになるのだ。子規を崇拜するとか、其の選句を待望するとかいふ、子規禮讃の意味でなく、子規の責任として「春夏秋冬」の事業を卒業すべきであつたと思ふのだ。

この論法から言へば、虚碧共選の「春夏秋冬」夏の部以下は、春の部と同種同族のものでなくて、多少異種異族と言つてもいい、變テコなものになつてゐるのだ。同じ血の流れてゐない、輸血性の不純味が濃厚なのだ。實際子規歿後、何とかしようぢやないか、と虚子と其の結末をつけることになり、幾分の名譽心も手傳つて、其の選に従事して見たものゝ、何だか人の借着をしたやうで、自分にしつくりしない妙な氣分の付き纏つてゐたことを覺えてゐる。

之を疑ふ人は、當時の「ほとゝぎす」でよく募集した、一題五句の五人選の結果を見るといい。二人三人と選者の多數が共選する句ほど、段々數が減つて來る。五人共選はせい／＼一句位のものだつた。さうして其の三座

天地人の最優秀とする句に、五人の誰もが一致した例はなかつた。子規も度々、各選者の趣味嗜好が、選者眼の進むにつれて、益々相隔たる所以を説明してゐる。一致するよりも、しない方が自然だと言つてゐる。つまり「春夏秋冬」の臺本はまだ選者眼を経ない募集句のやうなものだ。それを選定して「春夏秋冬」を作るのは、言はず三座の優秀作をきめるのと同じだ。子規の三座と我々の三座が別なやうに、子規の「春夏秋冬」と我々の「春夏秋冬」は、實に已むを得ないことであるが、可なり掛け離れてゐるのだ。若し極端な場合を假想することが許されるなら、我々の「春夏秋冬」夏の部以下に優秀な作として採録した句は、十中の八九、子規の駄句として捨てたものであつたかも知れないのだ。

併しさう言つて、「春夏秋冬」を完成しなかつた子規の無責任を洗ひ立てようといふのではない。否却つて、句集といふものゝ、さういふ内在性を考慮して、あの病苦と闘ひつゝ、春の部一巻だけでも纏めておいた、用意と苦衷、矢張り子規其人でなければならぬ處に頭が下るのだ。まさか、かういふ風に選をしる、と模範を垂れた、そんな狭い小さい考へではない。我々の第二次句集としての責任的な結末をつける、重大な關心を以てかゝつた仕事であつたのだ。だから其の序文にも「春夏秋冬」は最近三四年の俳句界を代表したる俳句集となさんと思へり」と其の抱負を語つてゐる。「辛うじて擇び得たる者亦到底俳句界を代表し得る者に非ず」と半ば否定してゐるのは、子規によくある禮儀作法の言葉だ。

一體子規は、いつも我々の選句眼に慚らなかつたやうに、自分の選句眼に、より強い自信を持つてゐた。最も

公平で、多面的で、中庸を得てゐて、カラクリやゴマカシを見抜いて作者の力相應を考慮する分別があつて、先づ何處から突きかゝられても、一寸のスキもないものだとか考へてゐた。突飛な、片よつた、穴だらけの選をして、怪我の功名で、時に意外な思ひもつかぬ佳句を拾ふやうな奇術は自分には出来ないが、其の代り、萬代不易、読み飽くやうな場當りは絶対拒否するとも氣構へてゐた。人のいふ程面倒な、煩さい、頭のコンガラカル、イヤな仕事でも無かつた。選句に興が乗つて來ると、綴じた原稿なら其の最初の二三句を見て、全部がどの程度のものか洞見された。一句の初五の二三字を瞥見して、あとは讀まずともはつきり感得出來た。天眼鏡をかざして人相を見るやうな、そんなへまなマドロ臭いものでは無かつた。實際一種の神通力とでもいふものが働いて來ると思つたこともあつた。

さういふ自信は可なり長くつゞいたが、それが幾分動搖を來たしたのは、ホンの三十四五年、もう重態のドン底に落ちてからだ。前にも書いた「俳談界」の席上で

道傍の野菊割籠を開きけり

が問題になつた時、道傍の野菊で切つて、割籠を開きけり、と別に讀み下すといふ説に對し「さういふ特別な調子は初めの間は變に感じるが暫くすると耳馴れて普通になる……野菊割籠も今ではいゝのか悪いのか判断に苦しむ」と言つてゐるのを、あとで知つた私は、實に子規にして異數なことだと思つた。さういふ場合、いつでも明快な判定が下された、我々の感じてゐた慣例が、言はゞこゝで一頓挫を來たしたやうな氣がしたのだ。

それも無論病氣のせいだ、昔のやうに批判的鋭鋒が働かないのだらう、と思つた。尤も子規も神様ではないのだから、勇敢に突込んで往けば、タヂ／＼したこともないではない。が、それとこれとは大分趣が違ふ。一時の思ひ違ひでなくて、今日迄の確乎とした自信の標準に立て籠つてゐられない、或る何物かを感じてゐるのだと思つた。

「春夏秋冬」を完成したい用意はありながらそれが中絶したのは、何度もいふやうに、主として病氣の爲めであつたが、今一步立ち入つて言へば、或は選句の困難味、句集編著の至難味に、新たに加味された、一層子規を警戒せしめる、又は逡巡せしめる、他の苦澁味が注がれたのではないであらうか。私一個の管見として、この疑問を呈しておきたいのである。

「春夏秋冬」に次いでの一事業は「獺祭書屋俳句帖抄」と題した、子規自選句集の刊行であつた。

この「帖抄」は三十五年二月に、其の序文が發表されたから、これも主として三十四年の病苦中に生れたものと解していゝと思ふ。尤も公刊されたのは三十五年四月であつた。

「春夏秋冬」の選を中絶して、一方に「帖抄」の選をした、公刊物よりも私刊物を先きにした嫌ひが無いではない。が、當時の俳壇の趨勢から言へば、何でも標準を子規に求める、其の一擧手一投足すが、全體の氣分を支配したのだから、公もなく私もなく、彼と此との區別を立てようとも、我々始め誰も考へてゐなかつた。どちらに、どこに、手をつけやうと、成るべく子規の都合任せに、仕事さへ餘計に残して置いて貰へば、それで十分

満足してゐたのだ。丁度「墨汁一滴」が絶えて甚だ物淋しく思つてゐた時「病牀六尺」が出始めたので、出来るだけ多くの言葉を聞かうとしたやうに。

「寒山落木」といふ自選句集の臺本が出来てゐたから、それから摘出するのはさまで骨が折れないだらうと思ふのは、皮相の觀察で、苟くも後世の批判を俟つ句の取捨は、却つて第三者として他の句を選択するより、一層迷ひが多いのだ。

子規は敢然として、其の困難な事業を、死出の土産に選んだのではなかつた。其の由來は、二月に書いた序文に明らかであるやうに、むしろ其の舊稿を繰りひろげて、其の想ひ出を榮む、と言つた病氣保養が多分に含まれてゐた。たゞ読み移つて行く中にも、自然にいゝ悪いの批判が下される。試みにそれを書きとめたのが「帖抄」になつた、といふ趣であつた。

其の序文を読むと、自分位下手な作者はない、自分の句集位駄句の多いのではない、と徹頭徹尾自己否定に終始してゐる。我々は「子規最後の謙遜」だと思つた程、死期に臨んで、我が生涯の非を知る底の文字に充ち満ちてゐる。或は私だけであつたかも知れぬが、子規がこれ位弱音？を吐いた前例がない、と何か胸を打たれるものがあつた。肝腎なと思ふところを二度も三度も繰り返して讀んだ。「自分の句は自分が輕蔑してをつたより更に下等なものである」「前年向ふ意氣の強かつた時天晴古今第一等の句集ぞと言はれるやうなものを出して見たいと思つてゐたのは雲泥の違ひがある」「芭蕉に叱られても蕪村に笑はれても一言の申譯もない」それらの文字が

特別大きな二號活字で刷つてゐるかのやうに、ムク／＼大きくなつて見えるのもあつた。

これは病氣の爲めに氣が弱くなつた、といふやうな精力の衰へから來る愚痴といふ種類のものではない。又た自選句集の拙劣さを——實は左程拙劣でないとの自信を持ちながら——豫防する爲めに布いた購謙の砲刊でもない。藝術的ともいふか、或は自己客觀の眞の評價ともいふか、すつと深く掘りさげられた底の奥底に、何か痛感してゐるものがあつた、それから滲み出る言葉であらうと私は思つたのだ。

或時枕頭で、「帖抄」を一見した話になつた。私は例によつて無遠慮に、今度の序文は随分思ひ切つて謙遜しておいでな、と言つた。子規は、さういふことを言つてくれる誰かを待つてゐたのだが、まだ誰からも聞かない、讀んでも氣がつかないのか、それとも遠慮してゐるのか、と答へながら、私の無遠慮な言葉を、さも待ち設けてゐるやうに、眞顔になつて言葉をつゞけるのだつた。

「お前はお前の句を一々書きとめといでるか。

「サア、ノート位に。

「一冊に纏めてもおいでるまいな。

「どうして、うつちやらかしてあらイ。

「さうかな、アシはこれで、お前も知つといでるとほり、丹念に自分の句を書きとめて、どこで、どんな處で、即席に言ひ捨てたもンでも、一つも落すまいと思つてな、自分の詠んだ句は、どれもこれも名句ぢや、とい

ふのでもなかつたが、どうも言ひ捨てにしておけなかつた、が、どつちかと言へば、名句か駄句かと言やア、まア名句の方に斤量が下がつたんだな……まア自惚れがあつたんだと言はれても仕方がない……それがな、今ちやア馬鹿なことをした、言ひ捨てたり、書き捨てたりしたものア、それツきりでいゝんだといふ氣がするやうになつてな。

いつまでも話しさうなのが、聞いてゐる私の方が苦しい。話す當人も息をつぎく、さう滑らかに言葉は出て來ない。餘り長く話すと、身體に影響することは十分わかつてゐた。

「イエ、升さんのは自分の句許りぢやない、我々のを始め、誰のでも丹念に書き抜いといでる、我々には到底出來ない事だと思つてゐたんだが。

話を反らさうとしたが、「まアお待ち」とやゝ押し付けるやうに言つて、もつと言ひたいことがあるのだ、と暫らくだんまりの息を詰めた。

「まア性分もあるがな、お前らの句だつて、アシの考へでは、どこで言ひ捨てゝも今は大事の場合だといふ氣がしてな、今はつまらんとするても、又たそれが非常に珍らしい、いゝ句になるかも知れない、實際お前、何年の俳句界といふので、前年の進歩を彼れ言うたのでも、席上では餘りうけのよくなかつたのを、アシが書きとめといた、それが役に立つたんだから……。

「實際アンナ句がいつどこで作られたか、ちつとも知らんのが大分あつたな

「イエ、そんなことをいふつもりぢやなかつた……さうよ、言ひ捨てたり、書き捨てたりしたものを、一々勿體がることは馬鹿氣なことだといふ……さうぢやロがな、句會の席上で、練りに練つて、これならといふ句でも、誰でもさうぢやロと思ふのだが、大抵句會に臨む最初の氣構へは、けふはいゝ句を吐かう、と可なり心を落著けて、場當りや見てくれは一切やらなかつてもかゝるのぢやが、おしまひには、どうやら變テコになつて、責塞ぎや、アテコミになつたりする……其の最初の一二句の自信のあるものもお前、又た一時評判になつて、名句づらをしたやつでも、少し経つと、何だといふやうなのが多いもんな。それでな、矢張いつまでも光つてゐる、味のあるといふのは、大體作つた本人も、同席した他人も、それほど氣にとめなかつた、さういふ方が多いやうぢやな、それがアシのは大抵自信があつた、そしてお前にも譽められた、そんな方がどつちかと言やア多いもんな、自分の句がくだらないと言つても、まさかこんなぢやなかつた筈なんだが、實にひどいことになつたものぢや、と今度本統に愛想がつきたんだが……。

子規は尙ほつゞけて、あの序文を本統に解釋して、自分の氣持を正直に享け容れて貰ひたいのだ、と反覆して言ふのであつた。

さう言はれゝば、もう月並なお世辭などは口に出て來ない。さうかと言つて、それ以上子規を感服せしめる高遠なことを言ひ得る柄ではない。一層のしかゝつて、生涯を終る前に振り返つて見りやア、誰でも自分の作位拙いものはないやうに思ふのぢやないか、さう思はん奴ア餘程自惚れで腐つてるのさ、と同輩扱ひの氣焰も吐けな

當時紅縁も書いたが、私も「獺祭書屋俳句帖抄を讀む」で、主として子規から感化をうけた想ひ出を、別に世辭でなく、正直に告白したのだつたが、子規はそれについて、何とも批評も感想も言はなかつた。いゝ加減なお世辭を言つてると思つて氣に入らなかつたのか、それとも的を離れた矢を射つてるとして黙殺したのか。

それはともかく「春夏秋冬」と「獺祭書屋俳句帖抄」とは、子規が俳句に残した最後の二事業であつたつたことを否めない。今後尙ほ幾年か又は幾十年かゞ経つて、明治俳句が眞に評價される時機に達した場合、始めて其の効果の認められるべきものであらうことを思ふのである。しかも其の二事業が、共に未完成に了つてゐることは、偶然のやうでもあり、又た皮肉な暗示のやうでもある。

二十五 繪を描く

子規が餘技的に畫をかき始めたのは、いつ頃からのことか、漱石に送つた手紙で見ると、三十三年二月頃のやうであるが、我々の知つたのは、すつと後であつた。大阪の露石が、こんな畫帖を送つて來てな、何か繪をかけエといふのさ、と小さな畫帖を見せたりしたのは、もう三十五年も夏頃のことであつた。

いつか晝前に一寸伺つた時に、板に張つた色紙倍大位の紙に、一面朝顔が半分出來上つてゐた。誰かの贈つた鉢植を寫生してゐるので、枕元を三尺許り離して其の朝顔が置いてあつた。早咲きの鉢植だから大方六月前後のことであらう。もう毎日のお伽に順番のあてられてゐた時分だ。

私は子規の繪といふものを、又た書いてゐる様子を始めて見たやうな氣がした。一度位正月の七草の鉢植を、墨繪でかいてのを見た記憶がある位で、大仕掛けに色なんぞ使ふのであるまいとさへ思つてゐたから、朝顔を瞥見した時、へー、と言つた驚きをさへ感じた程だ。

「色なんかお使ひるのか。」

「不折のお古ルをもらうて來てな。」

「そんなむつかしい、複雑な、よくまア寫生が出来るな、もうそんなに進歩おしたんか。」

「素人ツていかんもんぢやな、この花の色をお前、どうしても出んのヨ、塗つた上を塗つてく、たうとうこんなもんにしてしまつてな。

見ると成程、紫がよつた花がグチャ／＼にじんである。が、何とも言へない、いゝ色が出てゐる。のみならず、葉や花の位置から、寫生とはいふものゝ、全體の結構がどつしりして、頗る重厚な味が出てゐる。これ程の繪がかかると思はなかつたと言つて、二人で笑つたりした。

果物帖にしても、草花帖にしても、手さきや筆具合で、半分頭で描くものとは、全然別な趣がある。子規自ら言ふやうに、素人の不器用から来るゲテの味ひでなくて、品位があり奥行きがあり、さうして眞實を掴んだ迫力があつた。それに比べれば、大抵の畫人の繪は、たゞの筆さきで、小器用に、小綺麗に、コナしつけたといふだけで、何ともはや薄ッペラなものに過ぎなかつた。仰山に言へば俳人歌人で一家を成した子規は、今又た一家の畫人となつたのであつた。

我々のやうに、子規の感化を受けた者は、兎角世間の評價に對して、フ、ンと鼻のさきで笑つてのけたい輕蔑心が湧く。第一流の大家の作なんて、新聞を賑はすやうな物ほど、馬鹿々々しい氣になる。いくら子規の藥のきゝ過ぎもあるのだらうが、つい世間を外に、孤高飄零の王座を占めた氣で、ツンとすましてゐたくなる。さういふ氣分から、子規の繪にも、我田引水的な諷刺を呈するのではない。己を虚うした公平の眼から見ても、堂々とした繪畫的内容が充實してゐると思ふのだ。普通俳人のかく俳畫なんて、そんなゴマ化しものとは、まるで畑

が違つてゐるのだ。又た仙崖や木食上人などの、理屈ッぽい面白半分の戲畫類のものではないのだ。逃げもかくれもせず、正面から繪畫道場に打つて出た素面素手の作なのだ。若し言ひ得べくんば、子規の繪ほど、寫生の意義に徹底したものはあるまいと強調してもいゝのだ。どんな畫人の寫生にしても、筆辭、色辭、師友系統のマンネリズムの臭氣の交らないものがあるだらうか。

子規が病餘の樂みに書く繪だから、變な色や形や、繪になつてゐないものであつても文句はいへない。其の餘技的遊戯心を蹴飛ばして、繪畫としての正道、眞に生れながらにして體得した本筋を歩んでゐる、そんな立派なことがたゞの凡人に出来ることか。こゝにも子規のエラさが光つてゐると思ふ。物を投げやりしない、中途半端に考へない、眞に尊い遺訓であると思ふ。

が、惜しいことに、其の遺作が少ない。いくらも描き捨てたものであらうが、纏つたものが甚だ稀れだ。また断片的でもある。若し子規が今二三年も前に思ひついて、もつと澤山な大作小作を遺してゐたら、とそれだけが残念で堪らない。何も遺作の數の多少を争ふのではないが、若しさういふ事になつてゐたら、俳陣歌陣のやうに、畫陣にも亦た我黨の馬首を進めて、華々しい一戦を交へ、美術界の既成大家の心膽を寒からしめ、引いては畫界の空氣を一新する壯舉を見たであらうからだ。

いくら子規でも、さうく三面六臂の働きも出来なかつたであらうが、美術界の積弊については、もとから相應に苦々しく思つてゐた。爲山や不折の偉材に嚆望したのも、新進象堂を後援したのも、既成畫壇に對する、或

る反撥の現はれであつたことは言ふまでもない。必ずしも畫界革新に就いて、鶴の毛ほども考慮を拂つてゐなかつたとは断定出来ないのだ。

それにしても、多少腑に落ちなかつたのは、「病牀六尺」を賑はした、渡邊のお嬢さん南岳草花畫卷のいきさつだ。憂さ晴らしに美しい繪を見るのもいゝであらう。雙眼寫眞を本統に見得たかどうかを人に試すのも一興である。が、文鳳だの南岳だの公長だの一蕙だの、近代の筆工と言つてもいゝ、上すべりのした作品を、戀するといふ程に、熱意をこめて追ひ廻はす、それが本氣の沙汰であることが、どうも私には呑み込めなかつた。

私は二三度も丁堂を尋ねて幹旋の勞をとり、たうとう子規を詐はるのも心苦しいが、ベテン策を取つて、お嬢さんのお腰入れを果しはしたものの、子規はそれを小説體に繕つて獨り悦に入つてゐる、どうもそれに調子を合せるのに骨が折れた。

なぜと言つて、祕密なベテンをやつてゐることより、たゞ美しい繪本である南岳風情に有頂天になることは、少々我々の子規を裏切るものであつたからだ。自分で立派な寫生畫を書いてゐる。古今無類の獨創なのだ。南岳や文鳳の輩、下手なもんだな、と例の調子で一喝していゝ立場ではないか。あの鳳眼とかいふ白口眼がキラツと閃めいていゝとも思ふのだ。尤も寛大な抱擁性で、彼等にも亦た採るべき處がある、萬更捨てたものでもないといふ程度なら我慢が出来る。

それに今一つ、子規といふ人には、世間でいふ蒐集家らしい所有慾が少しもなかつた。俳書にしても、我々が

借りて行く、むしろ強奪するのさへイヤな顔をしたことがなかつた。どういふ珍書でも、それを欲しいと思つたことなど恐らくありはしない。尤も子規に巨萬の富を興へて見なければ、どう態度を變ずるかわからないやうなものゝ、其の淡泊な所有慾が、いつか齋客になるなどゝは想像されないので。まして其の病體、生命正に旦夕に迫つてゐる。よし天から降つた稀代の珍品であらうと、又た其の藝術慾を充たす偉大な發見であらうと、従前通り、あつさり借覽通讀で事足らなければならぬ。その前例を破棄して、是が非でも自己所有を主張する、實に意外な頑強さなのだ。

私の知る限りに於て、子規の言行に、意義の不明なものはあつたとしても、疑問を持ち、又は反抗を感じしめたこと皆無であつたと斷言し得る。細かいことに、横に寝てゐて箸を使ふ物の食ひ方もお手本のやうに思ひ、啖壺への啖の吐き方にさへ感服してゐたのだ。それにも關らず、南岳草花畫卷に對する態度は、大なる不可解な事件として、私の眼に映じた。さうして其の疑問を解くよすがもなく、永久の謎として残つた。私は今一度子規に會へるものなら、何よりも先づ此疑問を提出したいと思つてゐる。

二十六 仰臥漫録

「天下の人餘り氣長く悠長に構へ居候はゞ」の仰臥漫録の書き出しを、始めて讀んだ時は、平生とやかう文句を言はれながら、一寸どきつとして、こりやア面白いな、と氣輕な口もきけなかつた。

遺言をお書きのぢやな、心の中でさう思つて頭の中が熱で押しつけられるやうだつた。遺言といへば、見様によつては、子規のやうな場合は、一々の言動がどれも遺言であるとも言へる。月給四十圓といふのも、「一秋の蠅々たゞき皆破れたり」といふのも「珈琲一杯ノム」といふのも、「フーン忙がしくて結構ぢやな」といふのも、もう死に面してゐるからといふのでなくて、我々の生活なり行動なりの上に、それを反映して考へれば、どれにも何らかの意義は見出されるのである。

卅三年の十月、子規の誕生日に——舊曆九月十七日を新曆に換算して——四方太、虚子、鼠骨と私の四人が招かれた。其の事は仰臥漫録にも書いてをり、四方太にも消息してゐる。色を指定して、何か食ふ物か玩具でも持つて來いといふ妙な注文であつたが、後に、もう來年の誕生は祝はれない、最後の誕生といふ悲壯な催しであつたことを知つた。

で、卅四年の誕生を迎へる事になつて、又た來年の誕生にも會へるか知れない、といふ懸念からでもあらう

か、別に仰山なこともせず、家族でホンの心祝ひをしてゐる。

悲壯な決心をしての誕生祝ひ當日は、努めて愉快に、屈托なく、無邪氣に、笑へるだけ笑ふ、主人の機嫌のよさに、我々もつい釣り込まれてしまつたのであつたが、後でさうと知つてから、成程と合點のいくものがあつた。

つまり普通笑ひ話にいふ香典の前取りのやうなもので、よしんば生命はあるにしても、食ふ物も食へず、笑ふにも笑へない苦患の近き將來を考へ、食ひ仕舞、笑ひじまひをする意味であつたらしいのだ。

若し子規に遺言でも書いて置かうか、といふ意思が動いたとしたら、右の食ひじまひ笑ひじまひのつもりであつた卅三年の誕生日以後のことであらうと思ふ。

仰臥漫録が卅四年の八月廿六日に始まつてゐるから、そろ／＼誕生も近くなるといふので、比較的遺言の意味を明らかにして、先づ天下の人と出て來たのぢやないか、と私は思ふのだ。どつちかと言へば、其の後さういふ遺言めいた感想警句が、層々雲となり風となりと言つた風に、天下の事から我々一個の上まで、縦横に罵倒し憐殺するであらう期待を持つてゐたのだ。それが追ひ／＼普通の日記化して、いつ來て見ても、再び風雲を生じさうもない。少々拍子抜けの體でもあつた。

が、子規の方では、もう何にも出來ない、と言つて、何にもせずにもをれない、仕方なし日記でも書いて見よう氣になつて、紙を綴ちさせたのだから、お前は何でも仰山に物をお見るな、と笑ひながら叱られた。

卅四年一月から「日本」に「墨汁一滴」が出始めた。それは終りには、口述筆記となつた。一時中止して、もう何も出来ないのか、あの重態ではと思つてゐると、卅五年も夏近くなつて「病牀六尺」となつて、新たな不思議な元氣を見せた。それは大半口述筆記で、自ら筆を執つた例は稀れであつた。

其の點仰臥漫録は、如何なる場合にも他人の筆を交へない、又た交へしめない、子規自筆で終始してゐる。いよ／＼枯れて來るとでもいふか、其の筆勢墨色に手を觸れるだけで、敬虔な壯嚴味を感じるやうになつた、別に何も書いてなくとも、それが絶筆であるやうな、又た遺言であるやうな――。

もう我々に向つて言ひたいことが無くなつたのではないが、いつまで憎まれ口でもあるまいといふのであらう。仰臥漫録では、銚先きがお律さんのみ向けられてゐる。随分讀みづらい文句で、蔭ながらお氣の毒に思つてゐた。が、これこそさうとは言はぬ、自分亡き後のことを慮つて、特に露骨に強調した遺言であつた。肉親を罵倒してゐるのでは無かつた。この憐むべき婦女子をと、我々に向つて後事を依託してゐるのであつた。

四方太が寫生文「墓參」で、ウンとひやかされて居る。四方太別に苦い顔もせず、僕ア遺言を一つ貰つたよ。

蔭ながら大きな町に出にけり

移竹

を激稱して、蕪村派以外にも作者あることを諷す。それに次いで、地方雜誌が東京の流行を云々するを笑つて

……余等は諸子の句中太祇らしき句一句も見たることなく且つ召波調の句とはどんな句やらまだ研究もとゞかぬにさて／＼素バシコイ世の中なり。

と言つてゐる。

のび／＼し歸り詣や小六月

さそはれて妻をやりけり二一ノ替

位が、まア自分の句中太祇調とでもいふのであらうか、とも書いてゐる。

前日そんな話をきいたやうにも思ひ、私も相槌打つたやうにも思つてゐたが、かう書かれて見ると、今更のやうに俳句の流行についての最後の痛棒であるやに思はれた。それ以後、かやうな句界に就いての話は餘り無かつた。仰臥漫録を讀み返して、こゝに至る毎、これも遺言の一つであつたと思ふ。

二十七 意外なる祕事

この意外なる祕事は、子規歿前約十日前後、丁度病側に誰の姿も見えない、たゞ主人と私の間に起つた偶然の出来事であつた。

それは私にとつて、イヤ子規を知る總ての人にとつて、餘りに意外な驚天動地的な事實であつたので、私は久しく口外することを避けてゐた。それを公表していゝのか悪いのか、私には容易に判断がつかかなかつた。

子規歿して十年と経ち、二十年と経ち、知らず／＼の間に、歲月は流れて行くが、子規の事となると、年毎に記憶の新たなる思ひがして、依然として、きのふおと／＼ひのこのやうに、生々々しい想ひ出の盡きない私であつた。中にもこの祕事は、いつでも其の光景のあり／＼と描き出される、子規の聲の綾までが手にとるやうな、私一人の持つ寶珠の思ひであつた。

廿三回忌の時であつたか、ホンの子規親近の人にはばかり、其の想ひ出話をした。

が、それは子規と私と、今一人漱石の三人のみの知る祕事なのである。子規も居なくなり、又た漱石も亡くなつた。——漱石の生前一度この事をたしかめたく思つてゐたが、終に其の機會を得なかつたことを悔いてゐる——もう私一人の包蔵する祕密になつてしまつた。若し疑へば、私がどんな捏造をしないにも限らない。いゝ加減

に工んだ小説と思はれるのを憂へて、直接なり間接なり、其の事件に何らかの記憶を持たれるであらうお律さんに、始めて其の全部を提供した。丁度それより幾月前、或る雑誌にそれを匂はすやうな文章の載つた時であつた。さうして、私はこの祕事を側面からでも證明さるゝ何物かを望んだのであつた。

其の希望の充たされなかつたのは已むを得ないとしても、私の知る事實は、それが子規を強ひる夢でもなければ、架空の想像でもない、私の持つ、抹殺しようのない現實なのである。私が死んでしまへば、恐らく闇から闇へ埋没してしまふであらう。この前後處置をどうすればいゝのか。

かやうな前提で書き出して來ると、何か子規の生涯に影響する重大事のやうでもあるが、私の信するところは、どれほどの祕密であらうと、それを許かれて、其の生涯を轉覆するやうな子規ではなかつた。どこをどう突かれやうと、痛手を負ふやうな身構へではなかつた。わき目もふらず、まつしぐらに一筋道を騙けたやうな、陽光下に突立つた棒のやうな生涯に、謂ふところの陰影も祕密もないわけなのである。どこもかも明ツ放しなのである。だから、こゝに私が事ありげにいふのも、あの子規にしてといふ程度のもので、實は些細な、ホンの末梢的な、世間の標準から言へば、三日に一度ある東京の地震のやうに、戸隙子がゴト／＼いふ位な一小挿話に過ぎないのである。

たゞそれが、子規の生涯に於て、最も疑問視された性問題、殆んど適當に異性を知らずに過したであらう性慾關係に、自ら解決の寒子を投ずる告白をしたゞけ、興味百パーセントの好奇心を咬るまでゝある。子規が人知れ

「大著述を秘してゐた發見とでもいふならまだしも、やゝ猥談に類する下司話は、或はこの邊で中止した方がいいのかも知れない。」

「さりとて、これを公表したからと言つて、ムキになつて誹毀の告訴を提起する子規でもあるまいと思ふ。話半分では何とやら、私も勇敢に其の始終を語ることにする。」

一體かういふ性慾問題を、何か人間のすまじき恥辱のやうに考へてゐた子規は、餘程異性を劣等視した、封建時代の舊思想に囚はれてゐたやうである。他の學問的處世的思想は進歩的であつたにしても、異性に對する思想は退歩的であつたとも見える。尤も性慾の蔗境に入る餘裕のなかつたハンディキャップはあるが、子規が若し其の異性觀に動搖を起してゐたら、もう少しウマ味のある、おほどかな人間味を會得したかも知れないと思ふ。

丁度其の頃脚に水氣が來て、どうも磐石のやうに重くて堪らないと言つてゐた。もう疾くに死を覺悟してゐた子規も、新たに死を豫告する現象に對して、全然無關心ではあり得なかつたやうだ。

平生病側に近づくといふことのなかつた我々であつたが、此日は誰も居ないし、氣になる脚といふのが、どんな風なのか、不圖見たいやうな氣もしたので、私は何か言ひながら、病辱の裾に座をしめて、ソーツと蒲團をあけて見た。黒いブツ／＼のかたまりが斑點のやうに一面こがりついてゐる脚は、少し蒼味を帯びてブリ／＼してゐる。兩膝を立てゝゐたのか、其の後に立てたのか、はつきり覺えないが、私は膝から下へ、又た上へ、二三度右手でやんわりと撫でゝ見た。黒の斑點ががさ／＼して、掌の感覺は餘りいゝものでは無かつた。

「これがわかるかな。」

「又た二三度撫でるといふよりこすつて見た。可なり水を持つてゐるので、もう感覺はあるまいとさへ思つてゐたのだ。」

「わかるとも／＼。」

子規の答へは、感投的に甲高であつた。

「もつとこすつておくれ！ 右の方も。」

「ア、兩方ぢやな。」

私は左の手も添へて、左右の脚をそろ／＼撫でてゐた。

「お前、わかるともどころか、何といふイ、氣持だか、何とも言へない、もう堪らんのだよ。」

咽を握るやうにしていふ。

「病氣して以來、こんな心持のいゝ……誰でも汚ながつて、滅多に觸つてくれんけれど、人間の温か味のある肉のさはり加減が、こんなにいゝものかなア。」

詠嘆するらしくもいふ。少し大きな聲をしても、壓迫されるといふ衰弱しきつた身體にも、又たこの脚を腐らすやうに盛り上つた水を隔てゝも、肉感の接觸する快味は、まだ生き／＼として消滅はしてゐなかつたのだ。

「そんなにいゝ氣持なら、いつでもさすつてあげたのに。」

「御迷惑ぢやが、もちつとさすつておくれや、本統に堪らん氣持でな、愉快なテ、こんな愉快な思ひは……もうお前、食ひ物の楽しみもなし、見る物の楽しみもなし……もう何の楽しみもないものと、あきらめにあきらめてゐたのぢやけれな、まア蘇生の思ひとでもいふのかな、本統に難有くて堪らんよ……それにしても、人間の肉感といふものが、こんなにいゝ物とは知らなんだな、西洋人の握手したりするのも、かういふ、言ふに言はれん味があるのぢやらうな、エ、オイ、すると……今までイヤな事ぢやと思つとつたが、接吻もまたいゝものかも知れんなハツハツ。

愉快さうに語り、愉快さうに笑ひながら、脚の觸感をちつと噛みしめてゐる様子が、私にも嬉しいやうな、又た淋しいものであつた。

「ア、難有う、もうエ、ぞな。

時間にして五分とくくだ。私はもつとくくと言つて手をとめなかつた。

「さうなア、それなら片方の手のひらを、膝がしらと膝がしらの間へ、さし込んで見ておくれんか、そこが痛くてくどうにもならんよ、自分の力で離すことも出来ないし、まるで縛りつけられたやうになつてるのである。

「こゝへかな、かうな。

私は右の掌を平らにして、ガツンリくつき合つてる膝がしらの間へ、割り込むやうに上から押し込んだ。

「ア、エ、なア、綿やなんかと違つて、實にいゝ心持だな。柔らかい掌の感覺は全く別なものだ。可なり骨ツぽい私の掌を、口を極めて讃歎するのだ。

「そんなにエ、のかな、すると我々健康な者なんか、いはゞ贅澤なものだな。

「イエお前、アッだつて今日はじめて知つたんぢやけれな、肉の感じなんか、まア忘れてるので又たいゝのさ、時にな。

子規は頭を動かして起き上るやうにちいつと私を見て、さうして又あたりを氣配ふやうに眼をくばつた。

「あんまり愉快にしろたんて、何やら話したい氣になつたんだが……お前いつか、アッの流産として書いたものを知つといでるか。

意外な話頭である。さういへば流産と前書きした歌か句の連作體のものを見たやうにも思つた。

「見た覺えがあるやうぢやな。

「あれ知つといでるか。

子規は例のニーツと微笑む鼻樂に小鏡をよせて、話し出したのが、更に意外な事なのだ。ボンヤリ流産と題して、誰にもわからないやうにしておいたが、それは自分の切ない情緒の記念であつたといふのだ。

さうして其の事の始終を漱石にだけ秘かに打ち明けて、前後處置を依頼しておいた其の結果が流産といふことになつたといふ話の大筋である。

私はこゝに其の具體的な事件の委曲を盡すに忍びないものがある。如何に一エピソードに過ぎないとしても、亦た既に四十年も過ぎ去つた夢幻に類する物語であるとしても、子規がそれほど秘密にし口外することを憚つた——私には別に口外していけないとは言はなかつた——心事を思ふと、容易に事實の具象化にまで筆を進め得ないのである。他日又た何らかの機会を得てこれを公表することを得るまで、姑らく讀者の想像に委ねて、遺憾ながら漠然たるアウトラインを書くにとめて置く。

當時の私は、眞に言外、たゞ愕然として、胸をどきつかせつゝ其の一語々々に聞き耳を立てゝゐた。

其の話が一段落して、どう挨拶すべきか、私がまご／＼してゐる間に、更に「序でだから、これも言つておくがな」と冒頭して、第二の意外を投げ出した。

それは、青年期に自分の健康を害して、遂に咯血までしたのは、所謂思春期の攝生の誤りなので、餘り××を過度に樂んだ結果だといふ悔恨の意であつた。

私はこれにも答ふる言葉が知らなかつた。後に醫者である彌亭は、「ナアに誰でもいゝ加減やつてるのさ、人と比較が出来ないから、子規はそんなことを考へ過ぎてゐるのさ」とあつさり否定してしまつたが、當時の子規は、眞顔に眞剣に、思春期の攝生失敗者として、深い悔恨を胸裡に刻みつけてゐるのであつた。

ともかく子規と我々の對話といふものは、汚なげな、下司な、口にすべからざる事のやうに暗に默契して、性慾問題などに、一切觸れようとしたことはなかつた。吉原の話などしても、名山大川を語ると同じに、たゞ其の

風景観に觸れたのみだつた。話の末が猥談に落ちる、と言つた愚劣なものではなかつた。我々青年期のお坊ちやんに對して、多少警戒した心づかひはあつたにしても、むしろさういふ問題は、子規にさへ餘り多くを語るべき経験も材料もなかつた。自然回避の防備に包まれてゐたと言つていゝであらう。

實を言へば、明治廿七八年頃の我々の性慾發散行爲は、阪落しの急發展劇變化であつた。猥談性慾談ならば、むしろ子規を後輩に見下し得たかも知れなかつた。子規も十分それを呑み込んでゐたから、態と社評を著した嚴肅を装うてゐたとも解されるが、つまりは神聖な藝術を料理する手に、女の湯巻なんか持てないと言つた氣分だつた、要談以外空虚な無駄話なんかする邊がなかつたのだ。

それに今突如として子規の口から、秘庫を發いて、取つて置ききの性慾に關する經驗を告白するのだ。見るべからざる物を見たとか、口にすべからざる事を聞いたといふより、頭上に落雷でもしたかに、私の驚いたのも無理はない。

其後永らくこの秘事を胸中に抱きしめてゐた私は、殆んど神人視してゐた子規にも、凡人的なさういふ一挿話のあることが、却つて人間的に或る潤ひを與へる、子規の生涯に餘剩的な味ひを附加するものと思ふやうにもなつた。

さうして殊に、子規の氣持では大きな恥を忍んで、何人にも語るまいと決心してゐた、墜い秘事の扉を開くに至つた、其の環境の影響と其の心理の動きに、言ふべからざる味ひがあると思ふのだつた。固より前々から卑

備しお膳立てをして待つてゐたといふのではない。眞に其の場に突發的に起つた偶然なのだ。又たそれによつて私の勞に酬いるといふのでもなければ、今更それをどう結末づけるかの相談でもないのだ。人間の肉體感、肉と肉の接觸する末梢快感を久しぶりに満喫したところに、丁度摩擦によつて生ずる電氣作用のやうなものが、子規の満身に行き渡つて、さも感電的な昂奮と刺戟を起させるに至つたのだ。其の刹那の昂奮によつて死灰再燃し、曾ての肉感を喚び覺ますと同時に、在りし昔の事件の全貌までが彷彿として眼前に描き出されたのだ。或は身も世も病も時も忘れて、其の恍惚境裡に入り浸つてゐたかも知れない。其の感興の絶頂が、前後を顧慮する道もなく、言はゞ電氣の反應作用のやうに、自然の告白となつたのだ。固より懺悔するのでもなく報告するといふのでもなく、黙つては居れない餘儀ない衝動に驅られたのだ。多年胸中に秘めてゐた殘燼が、其の衝動によつて、地表を破つて噴火したのだ。

其の熔岩を吐き盡した子規は——當局者としての私の見方かも知れないが——、如何にも胸に痞へてゐたものを取り去つたかのやうに、身輕に爽快さうに、久しぶり眼元に紅を潮した生き／＼した顔を輝かしてゐるのでもあつた。私は、眞に一指頭の僅かの觸感に端を發して、それからそれと事件の全貌にまで、記憶から記憶が展開して行く、子規の心裡の波濤洶湧の様を考へると、其の刹那だけで、優に一篇の小説になるとも思ふのだ。そこには感興もあり、警戒もあり、或は恐怖も伴ひ、享樂の後の悲哀もあつたであらう。さうして異性に對する理想と實際と、宿痾の爲めに人間的快樂を奪はれた自己の希求と現實とに、他の想像もし難い深刻な想ひも慟みも

交錯したであらう。子規はむしろ普通の體面感で、一切を秘密にしてゐたものゝ、若し本統のことを割つて言へば、其の生涯に於て、最も複雑な多角的な、心的風波の起伏した時でなかつたかとも思ふのだ。私にもつとヂアナリストとしての餘裕があつたとしたら、事件の全貌に出入する子規の感想を、委曲を盡して質しておくのであつたとも考へるのだ。

尤も私は前にもいふやうに、子規の直話に對する私の感想を書くのが本意なのだ。事件の眞偽をたしかめて、子規の直話を更に事實として報告する意思は毛頭持つてゐないのだ。私はどこまでも、ニュースとしてこの事件を取扱ひたくはない。事件の内面に起伏する子規の心理を考察して、私の信する子規觀に一異彩を賦與し、引いては他の子規觀に、新たな考察の種を提供すれば足るのである。

たゞこの祕事に關聯のあるや否や、それは保證の限りでないが、子規の「病床手記」に左の記事と句のあることだけを引用して置く。——初め私は「流産」と題する聯作和歌六七首を見たやうな記憶があつた。鼠骨宵曲二氏に其の調査を依頼して、二氏を勞すること甚だ多大であつた。が、總ての調査材料に、和歌は無く、病床手記に句のあることを報告されたのである。こゝに二氏に對して深く感謝の意を表する。尙ほ左の日記は、中央に句を記し、其の日の出來事は、頭註のやうに細書したものである——。

十月九日曇

俳句ヲ分類ス
俳人蕪村ヲ草
某來ル
夜彌爾氏訪
ヘル

屋根ふきのごみ掃落す芭蕉哉
秋の空伽藍の屋根をあり人

流 産

水の月物かたまらで流れけり
手のものを取落しけり水の月

(序でに、或る消息通の話によると、三十年には漱石夫人も流産してゐるとの事であるが、月が違ふさうである。

若し子規がいふやうに、この事件の仕末を漱石に口頭でなく、手紙で依頼したとして、其の手紙が遺存してゐれば、其の眞偽は立どころに判明するわけである。私はさる證據書類を引用してまで、私を正しくしたいとは思はなかつた。又た其の證據書類を覓見することに、或る恐れをも感じた。さういふ穿鑿は他の好事家に譲りたいと思ふ。)

二十八 辭 世

殊更に辭世の句を作らないと言つた芭蕉を、さすがに芭蕉らしい、と話したこともある。又た大抵の辭世の句が、平生の技倆に似ない。あれ程の蕪村にしても辭世はどこか弱々しいと言つたこともある。

古人の辭世の句を概ね否定してゐたから、自分の場合にも無論思ひ及んだ筈であるが、どういふものか、辭世を作ることには可なり執著を持つてゐた。芭蕉でもない者が、芭蕉を氣取るのを避けた意味であつたかも知れぬ。死ぬる三日前に「九月十四日の朝」と題して、文章を口誦した程、死生の間に超然としてゐた人であるから、考へ得るなら辭世を考へてもいい、と例の強烈な心的生活力が働いてゐたのかも知れない。

明治卅五年五月十八日の「病牀六尺」と四月發行の「ほととぎす」の消息は、子規自らも「近頃不覺をとつた」と言つてゐるやうに、辭世に就いて閑葛藤のあつたことを明らかにしてゐる。それによつて、追憶の糸をたぐつて見ると、其の五年十三日午後六時頃、子規直筆の急使によつて、私は或る宴會の席上から駆けつけ、虚子も宮本國手も相次いで來著したのだが、子規の阿鼻叫喚の苦悶は、眞に見るに堪へぬものがあつた。其の夜は虚子宿直して翌十四日となり、病苦はやゝ平靜に歸したが、疲勞其の極に達して、何の食慾もなく、時には失神したのかを患へる程全く元氣がなかつた。其の夜私が宿直することになつたが、夜九時頃、枕元に坐つてをられた母堂

に、低いかすれ／＼な聲で、又たときれ／＼に、自分死後如何にすべきかの心得と言つたやうなものを、さも最後の遺言のやうに語るのであつた。側に他人の私の居るにも關らず、随分突込んだ辛辣な言葉も交る。あるにもあられすといふのは其の時の私の思ひで、さし出口はならず、膝を正したまゝ身動きも出来なかつた。

其の翌十五日の朝のことである。三日間の絶食にも累ひされたのであらう、もういよ／＼最期だといふやうな悲觀的なことのみを口にし、其の應接に狼狽困倒したのであつた。私の書いた消息に

……松山の親族へ電報を打たう、何と打たうか、サヨナラ、ネギシでわかるだらうか、ゴヤゲンヨウ、ネギシとせうかなどと言はるゝに到つては小生の衷心矢も楯も堪らず……御親族への電報ならば看護人より打つたかた穩やかなるべし、とて異議を申立てしに、さらば露月に、カッ○ネギシと打つてくれとて、電報頼信紙を取出するゝなど……

とある。今までも幾度か病體危険を報ぜられたが、私の知る限りに於て、こゝまで切羽詰つたことはなかつた。或は子規も他日告白してゐるやうに、以前自分が何死ぬるものか、と思つてゐる時には周囲が顫動し、今度自分が危険だと思ふ時には、周囲が冷靜である、と言つた多少の反抗氣分も手傳つてゐたかも知れぬ。

それから、秀眞の作つた子規の塑像を持つて來いと言つて、其の裏に「白題 土一塊牡丹生けたる其下に 年月日」と墨をつぎ／＼書くのであつた。「病牀六尺」にも「若し此儘に眠つたらこれが絶筆であるぞと言はぬ許りの振舞」とあるやうに、明らかに辭世の一句であつたのだ。

……お前はこれ（塑像）を持つといでるので手がダツイかな」「石膏といふものは墨附の心持の可いものだ」「ス／＼でも書いて見たいよ」など辭に言はるゝ……

と同じ消息にある。どの位の大きさのものか判然記憶はしないが、ともかく仰向けに寝てゐたなら、病體に觸れないやうに持つてゐなければならぬ。横向きであれば、字を書くに都合のいゝやうに向けねばならない。手がだるいより、其の工夫の方に苦しみつゝ、私はア、辭世の句だ、と「土一塊」の初筆で、もうちーんと電氣をかけられたやうになつてしまつた。

處が時経るまゝに天氣回復して、其の日の根岸祭りを祝ふ料理註文など、打つて變つた微笑平和な光景になつた。「この祭いつも卯の花下しにて」とさきの辭世はどこへやら、と言つた即吟さへ浮ぶ、周囲の愁眉を開くシーンとなつた。

これが歿年五月十五日のことであつた。この夏の酷暑を乗り切れば、或は又た餘命をつなぐことが出来るであらうとも、周囲の人々と話し合つてゐたのであるが、幸ひにさして危篤を患へることもなく過ぎた。同七月の「ほととぎす」消息に

……意外の事には例の腰の患部の痛み次第に薄らぎ行きて、昨今は殆んど其の疼痛を忘れらるゝ程とも相成り……されば子規君は其虚に乗じて元氣百倍日に十句二十句を作り、寫生畫一枚二枚を畫き、病牀六尺の原稿も手づから認めらるゝことあり……

と近來の快事とさへ報じてゐる。患部の痛みの去つたといふのは、其の癒者の爲めでなくて、却つて病勢の進行した麻痺状態でなかつたであらうか。

かくて九月に入つて、三四日頃より先づ下痢症に罹り、日に三四回の便通を見、同八日に初めて脚の水腫を發見した。當時の消息に

……丁度點燈後小生——碧梧桐——と外に數人例の枕頭にて何くれと雜談中、子規君もいつになく快詞を挟み一時病苦など忘れられたる様子ありしに、突如同君の聲にて「アラッ」とさも驚きたる調子に叫ばれ候、何れも何事の起りしぞと、病人の方を注視したる際「早く灯を見せおくれ」と甚だ性急に申され、母上と妹君ヲソブを提げて其足の方を照されしに、子規君つくづく己が足の甲を見て「コンナに水を持つて……」と申され……聞けば其の水腫れは數日前より其兆候見えしも、さして著しき變化も見えざれば、それと病人にも明されざりしものゝ由……

とある。醫師は運動不足の病體には普通に見る徵候だと言つてゐるが、子規は「甚だ不氣味なものぢやな」と不安な言葉を漏してゐる。七八月小康を得てゐた病勢は、この水腫を皮切りに、再び猛威を逞うして、十日の朝には腰部以下の自由を失ひ、且つ左右兩足の位置によつて劇烈な痛みを感じ、モヒ劑も功を奏しないので、十二日には皮下注射を行つてゐる。子規の苦悶状態は其の極度に達したらしく、自ら「拷問」と歎息してゐる。十三日再び注射、十四日水腫腰部に及び、といふ風に加速度の昂進を示して、十八日の朝となつた。

午前十時頃、いつも畫を書く紙を貼る板に、唐紙を張らせたのをお律さんに持たせて、仰向けのまゝ何かを書かうとする。もう餘り物も言はない。痰が切れないといふことで、可なり苦しうな咳をする。私が筆に墨を含ませて、子規の右手に渡すしぐさを幾度も繰り返して、

糸瓜 咲て 痰の つまり 佛かな

以下三句の絶筆が出来た。私は五月の辭世の先例もあるので、又たこの辭世が笑ひ話の種となるのでないかの空想を描いたりした。この三句の辭世のことは、「子規言行録」に私の見たまゝを詳細に報告してゐる。一句書いては休み／＼して、最後の「取らざりき」を書き終へた後、筆を捨てるのもの臭さうに、穂先がシートの上に落ちて、少しばかり墨を印した。其の畫板は其のまゝ病室の障子に凭せかけられて、誰にでも見えるやうになつてゐる。子規も一度はそれを注視したやうであるが、何とも口をきかない。先程この辭世を書き始めてから、一切だんまりで、誰一人口をきかないのであるから、病人の咳が時々静寂を破る外、シーンとして闇の底へ落ちて行くやうな、重々しい空気がよどんでしまつた。それに辭世がいつまでもそこにさらされてゐるのが辛らかつた。どこかへ片付けようか、と言つて見たい咽が強張つて詰つてゐた。

どうも五月の時のやうな餘裕も活氣もない、もうぐつたりした子規であつた。一切萬事これでおしまひだ、と言ふ風にも見える顔色でもあつた。私は何を聞かうにも、何を話しかけようにも、頭の中が洞ろになつて、考へも工夫もなかつた。とよんだ部屋の空気に金縛りになつて、指一本動かすことも出来なかつた。子規は最後の元

氣で、句を考へる力もあつたのであるから、次ぎに辭世の歌をと思はないでも無かつたであらう。又た、そこらに居合はす誰にでも、更に最後の言葉を與へよう思ひに耽つてゐたのかも知れない。不幸にして、丁度其の言葉を分つ適當な人が居なかつたせゐで、餘儀なく、沈黙してゐたのかも知れない。或は平凡なお別れの言葉なんかと、この二月頃時々試みてゐた佛傷のやうな、奇拔な文言でも練つてゐたのか。それとも最後を取り亂さないやうに、心の平靜を破るまいとしてゐたのか。

遺憾ながら、この三句の辭世は、終に眞の辭世になつてしまつた。又た好個の記念の絶筆ともなつてしまつた。私には、そを書き終つた當時の息詰まるやうな沈黙の方が、一層深く焼きつけられた辭世の印象となつた。

二十九 死 後

辭世を書いて間もなく、電話をかけた虚子が來た。醫者が親類へ電報でも打つた方がいゝだらうと注意したが、二人はまだそれ程さし迫つた状態のやうな氣がしなかつた。今まで幾度か狼狽させられた経験が、容易く危篤感を享け容れないのである。たゞ重なる松山の親類にだけ端書を出す事にした。

子規は昏々として眠つたり醒めたり、別に非常時らしい氣合はなかつた。二三の來客も、それでも曾ならぬ部屋に空氣に壓せられてか、皆長坐せず去つた。

晝も過ぎ、お晝の我々の御馳走も、枕頭を離れて物靜かに箸を取つた。

午後五時前後であつた。病人が又た苦悶の聲を上げ始めたので、モヒ頓服をしたが、それが又た功を奏しないと言つて、叫喚號泣、慘鼻の場面になつた。主治醫へ電話して、其の來診を待つまで、たゞ手に汗を握るのみであつた。

宮本主治醫は、さまで重大視する様子でもなく、又た注射しますかなと、三十分位前にモヒ頓服した旨を話しても、たゞ「イエ」。

病人は、それでも宮本主治醫と、何か二言三言應答した。さうして、間斷なく悲鳴を擧げるのである。

「今に樂になりますよ。」

「さうで……ア痛ッ……蕪ッ……」

さすが主治醫も、もう應答の餘地がたかつた。又た周圍に居る者を捕へて、病狀報告の餘裕も無かつた。

凝視と胸の鼓動が、病人の上に死の如き沈黙を翳すのであつた。

注射後頼みに安靜になつて、すやく眠るやうになつた。私は「ほととぎす」の校正が迫つてゐたので、この間にと子規庵を出た。今朝からの重壓を解放されたやうな氣になると同時に、明朝は又た、きのふは騒がせてすまなかつたな、と朗らかな顔してゐる子規を見るだらう豫想を描いて、伸びくした心持になつた。そんなことを言つてはわるいが、又た狼來れりさと、獨りで首肯くのもあつた。

校正が手間取つて、夜遅くもなつた。明早朝見舞ふつもりで、子規庵から歸つて來た姉に容體をきくと、ウー時々唸るやうな聲はするが、まだ熟睡してゐるとの事であつた。私の豫想などを話して、寢に就いた。

草臥れてグッスリ寝込んでゐる處を叩き起された。虚子の聲で、「升さんお死にだよ」と言つた。アタフタ著替へて、子規庵に來た。餘りよく熟睡してゐるので、虚子も寝かせて貰つたのだが、今起されて見ると、もう子規は冷たくなつてゐた、とのことだ。餘りのことに、涙も出なければ、挨拶の言葉も出ない。呆然としてたゞ枕頭に坐つたまゝだ。たゞ驅けつけて來る中、十七夜の月が、磨ぎすました刃のやうに、冷たく凄く咬々としてゐたことが、何か子規の死と因縁づけられたものゝあるやうな、ボンヤリしたことが頭の中を往來してゐた。

やがて陸翁が見えたので、三人しめやかな後事談に入つた。成るべく故人の意思を尊重するたてまへで、近郊のお寺に土葬する爲め、道灌山邊のお寺を選ぶこと、總てを質素内輪にして、死亡通知も、親戚親友の範圍にとどめることなど大體の方針がきまつた。あとで知人名簿などを開いてゐるうちに夜が明けた。

虚子は「ほととぎす」に死亡通知を間に合せると言つて出掛けた。

宮本主治醫から、石炭酸、硼酸水、繻帶など持つて來て、屍體を始末することであつたが、居残つた私らにしては、どうもいつ迄も、病臥のままの姿を見守つてゐるに堪へなかつた。いまだに號泣苦惱したまゝの寢姿で、脚部の方は、半分蒲團から食み出したやうな姿勢であつた。それは病間の中央を占めて、一寸觸つても聲を立てさうな様子でもあつた。

「どちらかへ片付けませうか」

とは言つたが、それといきなり手は出せなかつた。

「さよふ」

をばさんとお律さんと私と三人顔見合せて、しばらく言葉のあとがつよかなかつた。始めて胸へこみ上げて來る熱いものを感じるのだつた。

「さうよなア、このまゝぢや……」

をばさんがさう言はれてから頭の方へ、お律さんが裾の方へ。ともかく斜かひになつた身體を眞直に直さねば

ならない。静かに枕元へにじり寄られたをばさんは、さも思ひきつてといふやうな表情で、左り向きにくつたり傾いてゐる肩を起しにかゝつて

「サア、も一遍痛いというてお見」

可なり強い調子で言はれた。何だかギョッと水を浴びたやうな気がした。をばさんの眼からは、ボタ／＼雫が落ちてゐた。お律さんも臉をしばたゝいて伏目になつて……。

「サア、そちらも早ヨおしんか」

をばさんに勵まされて、どうやら眞直に蒲團に寝た形になつた。少し北寄り、すつと東の襖の方へ、蒲團ともすらした。

「どうも長い間お骨折りでしたが」

そんな御挨拶はこの際口には出なかつた。又た「長いことお世話になりましたが」そんな辭禮を言はうともされなかつた。

私は昨夜「ほとゝぎす」の校正を終つて後——當時活版所は神田の熊田といふのであつた——歸途宮本に寄つて、同國手にも會ひ、まだ四五日は異變もあるまいとの事に安心してゐた話などをした。モヒ劑のあとにすぐ注射した、それが病體にきゝ過ぎたともいふのであらうか、と語り合ひながら、升さんにはお氣の毒であるが、も一遍「アッ痛ッ」とか「どうするのぞいッ」とか、怒鳴るのでも怒るのでもよい、正氣づいた聲が聞きたかつ

た、といふやうな一つの思ひに押されて往つた。さう言へば、何時頃であつたか、一度眼をさまして、牛乳でも飲まうかといふ。餘り元氣な聲でも無かつたが、もう食欲が出たといふので何れも安心し、すぐゴムの管つきを保持つて行くと、一杯だけ快く飲んで後、至極落著いた聲で

「誰々が来ておいでるのぞな」

と言つた。あれが子規の言葉として最後のものではあらうとのことだつた。お律さんが、丁度枕頭にゐた、虚子、鼠骨、私の姉の名前を答へられたが、其の後又た前後不覺に、うつら／＼眠つてしまつたとのことだ。子規が大往生を遂げる三四時間前のことであつた。

一體子規といふ人の精神は、何處まで正確で透明であつたのか。注射をしたから昏睡状態に入つたが、若し注射をしなかつたら、阿鼻叫喚をつゞけつゝ、矢張九月十九日午前一時頃幽冥境を異にしたであらうか。名僧の中には、自分の死期を何時何分とまで明言し、其の時に合掌しつゝ眠るが如く往生した、などいふのがいくらかあるが、それが果して何處まで眞實であるかは保證し難い。さういふ坊さんも、恐らく子規のやうに、病氣の爲め精神をそこなはれず、錯覺や昏睡の微塵もなかつた状態をいふのでないかと思ふ。若し子規の號泣怒號するのを其のまゝに看過してゐたとすれば、卒然として「馬鹿ッ、糞ッ」で言葉を斷つた、それが子規の大往生であつたといふやうなことになるはしなかつたか。怒號しつゝ子規は死んだ、といふ大結末であつてもいゝやうな氣もする。それは名僧の死期を知つて、眠るやうに逝くのと同じことなのではないか。私はそんな冥想にも耽つてゐ

た。

いつか蕪村忌の大勢で撮った寫眞の裏へ、碧巖録の物眞似だと言つて、「お前方みんな腹の空いた奴ばかりだ、俺の小便で頭を洗つて来い」とか何とか書いたことがある。又た一つへは、「お前一人か連衆はないか、連衆あとから汽車で来る、其の連衆に懷中をスリ取られるな、芭蕉蕪村掏摸の親玉」とも書いた。その通り、我々は其の小便で頭の洗ひやうが足りなかつた。掏摸に取られてばかりゐた我々なのだが、又た一人子規といふ親玉がふへたことになつた。

小便で頭を洗ふと言へば、もう洗ふにも何にも、搜瓶もへつたくれもなくなつてしまつた。今まではこちらで洗ひたいと思へば、いつでも用が足りた。それを思ふ存分洗はずに怠けて過しただけなのだ。いくらか懸命に洗ひたくなつた時には、其の小便はもう水の手が切れたのだ。笑ひ事ぢやない。お前らどうでも勝手にしろ、と突放されたのだ。頭の洗濯はして呉れる、甘い餌さを飼つて呉れる、こつちへ来い、そつちへ行くなと手を取つて呉れる、痒い處へ手のとゞく、著物の著襟から箸の上げ下ろしまで世話やいた、其の命の綱とも頼む者が無くなつたのだ。一人立ちの出来ない、よろ／＼した日蔭の蔓草で取り残されたのだ。我々はどうすればいいのか、イヤどうなれと言ふのか。

何にも今に始まつた事ではなし、とうからかうなるべき運命を忘れてゐたのではない。ちやアんと心得てはゐたのだ。扱て事實がかうなつて見ると、事前の豫想と、事實への直面とは、又た別な迫眞力が違ふ。もういいい

よどうにかしてくれる、何とかならう他力本願は言へなくなつたのだ。こゝで我々がへまをやらうものなら、第一に故人を恥かしめる。俳道が闇になる。といふより我々そのものが丸潰れになるのだ。

芭蕉の歿した後のことを考へて見るがよい。蕪村の死んだ其の後を見てもわかる。元祿から寶永享保となつて、芭蕉の息のかゝつた連中が、世を去つてしまふ頃には、もう俳道は眞闇、月並の南風吹き荒んだではないか。芭蕉の息のかゝつた連中にしても、本尊歿後間もなく、アヤフヤな俳論をしてもう歸趨に戸惑ひしてゐるではないか。さう言へば、去來、文章、其角、嵐雪、許六、支考十哲ぢやの何ぢやのいふが、矢張我々同様日蔭の蔓草であつたのかも知れない。蕪村の後とは言へば、召波・几董・大魯は早死にしたが、月居のやうな秀才視された奴が、化政時の大宗匠になりすましてゐるではないか。子規歿後！それは我々の事なのだ。我々の頭の上には、もう大きな／＼、重みを持つた、月並の笠が落ちかゝつてゐるのだ。それを著なければならぬ自然の運命のやうに。思へば思ふほど重大な事變と直面してゐる自分であることにおのゝかれるのだ。

冥想は冥想を生み、妄想は妄想を胎んで、いつまでも果しがたい。

「宮本さん、遅いな」

をばさんの言葉に、ハッとして、それから我々で始末をする事に一決した。間もなく大勢のお悔み客が来るであらうに、このまゝでは我々の方でいゝ感じではなかつた。

私は表へ飛び出して、繻帯と石炭酸と脱脂綿をウンと買つて來た。腰から下を包んでしまつて、一切臭氣のし

ない、清らかな感じにするには、五本や十本の繻帯では足りないと思つたのだ。

患部を御存知のお律さんと二人で、先づ存分に石炭酸を撒くやうにふりかけ、それから脱脂綿をあて、繻帯を巻く手順の爲め、足を持ち上げた時に、覚えす我々の面を打つ意外なといふより、不気味な事實が突發した。

こんな事を書いて、讀者諸君に氣味の悪い、イヤな感じを與へるのも本意ではないが、子規の病體が略ぼどんなものであつたか、約五年釘付けになつた病床が、どんな影響を與へたかの一端を語るものとして、たゞ一言、丁度雪隠で見るやうな尾のある虫が這ひ出した、といふことを御報告して置きたいのだ。

私は前に子規は肉體に生きず精神に生きたことを述べたが、如實に、子規の半身は疾くに腐爛してゐたのだ。生きてゐたのはたゞ上半身だけだつたのだ。私は改めて、半身を蝕まれても、更に減退しなかつた、生きる力の強固さに打たれるのであつた。

胴からかけて脚まで、すつかり繻帯の木乃伊のやうにして、顔や手には湯鐘をし、蒲團を改め、衣を代へ、初めて清淨な佛様になつたやうな氣がした。

北枕にして、線香臺、一本の櫛、懐劍一振、一通り體裁の調つた處へ、飄亭、鳴雪、四方太、古一念……いつの間にか故舊堂に滿つることになつた。

鳴雪を座長にして、戒名は「子規居士」に定まり、田端大龍寺を新たに菩提寺として、墓地見分を濟ませ、葬儀の日取、當日各部署の分擔、追悼句會の決定等、總てすらくと運んだ。尙ほ墓穴には、棺上に墓志銘とし

て、永久不滅の物を入れる事にしたが、嘗て子規自ら作つた墓志銘のある事は、當時まだ判明してゐなかつたやうに思ふ。で、「子規正岡常規、慶應三年九月十七日生明治三十九年九月十九日歿享年三十六」の三十五字を刻むことにした。

十九日の御通夜は、ホンの親近の五六名に過ぎなかつたが、翌二十日の夜は「日本」の同人、俳句和歌の連中二十餘名、談笑平日の如くなるべしの遺言通り、各所に舊事近狀の故人を偲ぶ談笑盡きず、子規も亦た其の席に在るかの感があつた。

二十一日の葬儀は白張二對、野花一對を先頭に、百五十餘名の會葬者肅々として、根岸庵より徒歩、田端大龍寺に著。かたの如く讀經燒香を終つて、「正岡常規墓」の墓標を新たに仰いだのは、丁度午前十一時頃であつた。私は先着の準備係として、大龍寺門前に「正岡寺」の三字を書した紙を貼附した。

初七日の法事、弔文、弔句、弔歌、香奠等の惠贈者に對する挨拶、四十九日の法用追悼會等歿後の諸事略ぼ結了して、さうして我々に残されたものは、日に／＼まさる寂寞の感のみであつた。

子規歿後約一ヶ月を経て、「日本」の文苑俳句欄の選を私にやれとのことだつた。子規遺業のうちで、重大性を帯びてゐたといふものは、先づこの「日本」の俳句欄であつた。表向きは、虚子は「ほととぎす」を持つてゐるからといふ理由に過ぎなかつたが、「ほととぎす」を繼續してやるといふことより、「日本」を繼承することは、遙かに重大な意味を持つてゐた。

子規のやうな人であるから、或は意中の人を作つてゐたかも知れぬ。自分亡き後は、誰を選者にすると、内々漏らした事があるかも知れない。が、我々には、一切さういふ問題に觸れて話したことはなかつた。又た我々にしても、誰が後継者にならうと、一向念頭にも置いてゐなかつた。大方「日本」の方にも、内意が洩らされてゐなかつたので、従來の關係をたどつて、私を指命する——又は虚子を指命する——外なかつたものらしい。

この際「日本」の選者になることは、言ふまでもなく、名譽に伴ふ苦難の燒點であつた。社會的にも文學的にも、身の安全無事を希ふ者の、容易に立ち入るべき位置ではなかつた。世の諺にも、亡くなつた奥さんの後入りには嫁ぐなといふ、偉人の後を承くるものゝ總てが凡人視されるのは當然のことである。まして無限の信賴のかけられた子規一代身上の俳句である。如何に猪突的な私でも、一應は考へて見ねばならなかつた。

若し子規意中の人があつたと假定するなら、それを途中で奪ふやうになるのは望しくない。意中の人の有無は別として、従來の歴史や位置が私に幸ひしたと思はれるのも餘りいゝ心持ではない。大いに子規の後継者顔をして慙勉これ努めたにしても、結局「成つてをらん」不名譽を贏ち得るのは、尙更ら好ましいことではない。と言つて、たゞ子規の後塵を拜して、どうやらお茶を濁してゐる程度と思はれるのも聊か癢だ。これまでの子規直系の作家に、どうか宜しく願ひします、と投句の憐みを乞ふのも不面目なことだ。若し私がこの選を辭して受けなかつたら、それでは誰がやる、といふより社の方ではきつと生意氣を言ふとせよら笑ふだらう。一體この「日本」の俳句欄は、今では子規派といふより、日本の俳道の中心と言つた、公的性質のものになつてゐる。早い話が今

後誰がやるにしても、其の公的性質を傷けたり、其の價値を減殺するやうであれば、公選的に其の選者を交代せしめてもいゝのだ。我と思はん者は、俺がやると自薦運動をしてもいゝ位のものだ。又た一旦引受けてやつて見ても、自己批判で面白くないとなれば、さつさと旗を捲いて引き下ればいゝのだ。何もさう子規の聲望と信賴を重大に見て、躊躇逡巡するに及ばない意味もある。どうせ子規のやうに、抱擁性の大きさも選拔眼の鋭さも、我に具らないのは知れきつてゐる。偏よつたものであらうと、局部的のものであらうと、文學的レベルの上に活躍してさへをれば、以て其の任を果したと言ひ得るのだ。敢て子規の管見を批評するのではないが、この一二年「日本」の俳句欄が多少ダレたとは、私のみでなく、一部の人士も認めてゐる。子規の健康の障害によるものと思像されるが、たしかに三四年前の澁刺味を缺いてゐることは争はれない。殊に子規の永久の死は、この沈滯氣分に一層の暗影を翳しはしないか。

私はこんなことを考へてゐる間に、幾分氣分の軽くなるのを覺えた。さうして、この任に當つて私のベストを盡すことが、とりも直さず子規への報恩の第一であると思ふやうになつた。

恐らく子規は、俳句の前途がどうなるものか、趨勢の如何に多少の不安を抱いてゐたであらう。我々門下生の今後にも、必ず破端百出の危懼を感じてゐたに相違ない。其の不安と危懼を、最少程度でも取り去ることが、結局後に残されたものゝ第一の務めでなければならぬ。それが又た、監視者のなくなつた我々個人としての今日を處理して行く、生活のモットーでなければならぬ。

「ナア升さん、アシに「日本」の選をやれといふのぢやが……」

「まアさうぢやらうな……おやりや」

私は何心なく子規とのこんな應答を夢のやうに描いて、一應子規の承認を得たいやうな、又た得たやうな淋しく不安氣な氣持を心にくりかへすのであつた。

餘 録

一 子規自叙傳

いつか病床のつれづれ話に、「ほととぎす」の材料に、子規の自叙傳體のものを話して貰へまいか、と言つた時、手輕に承諾してくれるものと思つてゐたのが、案外氣むつかしい顔をして、何も話す程のことはありやアしない、と少しく御機嫌がわるかつた。大方波瀾も曲折もない、一本道のやうな見え透いた經歷を、殊更らしく吹聴するに當らない、といふ謙遜な氣持から、餘計なことだと思つたのであらう。

が、此頃になつて、あらゆる子規の書いたものに、大雜把ながら目を通して見ると、普通人の自叙傳にすら不明に附せられてゐる、生れ落ちた時から、幼年青年時代を始め其の生涯の大抵のことが、可なり詳細に、其の時日までが略ぼわかる程度に書き盡されてゐる。若し子規全集と「ほととぎす」第五卷までを、仔細に點檢して、其の年表を作ること成功するなら、恐らく或る記憶をたどつて晩年に書く自叙傳よりも、十分な正確さを持ち得る一卷となるであらう。

何かして居りたい、手持不沙汰でボンヤリして居れなかつた性分から言つて、無意識にも先づ手にするのは筆であつた。筆を持つことに何らかの快感があり満足があつた。

明治二十九年以後、禁足同様旅行の刺戟と新鮮な見聞を絶たれ、遂には病床六尺の間の些末な事實の變化を樂むにとどまつた。

一方を塞がれたものは、何處かに出口を求めやうとする。子規の筆が、多く過去の回想に費されたのも、新たな見聞を閉塞された自然の傾きであつた。

自叙傳と名づくべきものなくして、いつの間にか自叙傳を完成してゐる子規の如き人も亦た稀れであらう。

二 嗜 好

勝負事は餘り好まなかつた。又た餘り上手でもなかつた。いつか誕生祝ひの時であつたか、聯珠をやつたことが、たゞ一度あつた。長い交際の間で、眞に破天荒のことだつた。

スポーツも餘り好きではなかつた。子供時代に竹刀を持つたこともなく、角力を取つた経験もなかつた。まして掴み合の喧嘩など思ひもよらなかつた。

それがどうして野球に限つて、今まで祕密に留保されてゐたスポーツ氣分を、一時に迸發するかのやうに、有頂天になつたか、まア奇蹟と言つてもいゝ、變態現象であつた。

若し永く健康であつたとしたら、或はテニスに、撞球に、ゴルフに、新しいスポーツに興味を持つたかも知れなかつた。

或は單純な勝敗主趣の遊びを子供らしいと思つたかも知れぬ。合理的な戰術の複雑な展開でなければ、興を見出さなかつたかも知れぬ。序でに、「ベースボール」を譯して「野球」と書いたのは子規が嚆矢であつた。が、それは本名の「升」をもぢつた「野球」の意味であつた。

音楽を聴く耳も、さまで發達してゐなかつたやうだが、それは耳を發達せしめる準備も修練もなかつたに原因

する。

落語はよく聴いたやうで、當時の圓朝の話など、時には話題に上つた。が、其の寄席を追ひかけるやうなフ、ンでは無かつた。清元、常磐津などの論ひ物に至つては、先づ耳にはなかつた。時々我々の論曲を聴くのが關の山位であつたが、これも半分はお義理がかつてゐた。大分病氣も悪くなつた後であつたが、其の頃論曲に或る悟りを開いて、論曲らしいものに漸く漕ぎつけたとの自信を持つてゐた私は、こゝで大いに聴いて貰はう意氣込で論ひ出すと、物の半枚も進まぬうち、とても頭に障つて聴けないと言つて中止させた。

子規の書いたものうち、音楽論めいたもの、殆んど皆無と言つてもいい。

衣食住の衣住に手のとどく財政状態でなかつたのは無論であるが、残された一つの食も、御馳走論の背景はあつたやうなもの、まだ〳〵書生趣味以上には出なかつた。

夢は大學時代の豊國の肉に通ひ、根岸に始めて出來た西洋料理屋の常顧客である位がせい〳〵であつた。

蕎麥、鮓、天麩羅、鰻、この四つの東京名物さへ、子規は本統の味を知らなかつたと言つてもよかつた。

子規と通人とは、何處まで往つても交錯しない二本のレールであつた。

根岸庵の掛物は、一年ブツ通し藏澤の竹であることを、子規はむしろ誇り顔に語つてゐる。家の什物を始め、骨董趣味、蒐集趣味、さういふ有閑味は、鶴の毛ほども無かつた。先年明治三文豪の遺愛品と言つて、漱石紅葉子規の常用文房具を展覧しようとした時、根岸庵の硯箱を一見して、其の餘りの粗末さに當惑した話がある。

生活常用品は、用さへ足りる主用觀念以外何物もなかつたやうだ。

どうも此人にしてと言つた、スポーツの野球のやうな、特殊な好みがあつたかも知れぬが、私にはどうも思ひ出せない。強ひて言へば、果物の贅澤——他に比較して——位で、柿、西瓜を第一に、其の他選ぶところはなかつた。

バナ、が始めて我々の口にはいるやうになつた時、香氣と言ひ甘味と言ひ、剗くに手のかゝらない點、齒ざはりのいゝ具合、潤ひのある色など、これこそ理想的な果物でないか、と私が讚嘆したのに對して、さほどでもない、と軽く否定しつゝ、私の新物喰ひを笑つたことがある。我邦所産品に對する味の執著といふより、さすが好物第一だけの精確な批判標準の味覺を持つてゐたのである。

三 癖

鷗外全集に、指や小鼻の垢を丸めては、そこらぢうへはぢく、如何にも汚らしい癖のあつたやうに書いてあるが、少し仰山なばかりか、人違ひでないかとさへ、我々には思はれる。子規は風呂すきでなく、七日に一度十日に一度といふ位であつたから、無論小さつぱりしてゐる方ではなかつたが、まさか人を訪問して其の主人側の鼻先きへ丸薬を散發するなどの、無作法を演じる人ではなかつた。どうでもいゝやうなことではあるが、一應は子規の名譽の爲めに辯護して置きたいのである。

どうも我々の知る範圍に於て、子規には癖らしい癖はなかつた。無くて七癖といふが、言葉、顔つき、手つき、何一つ印象に残るものはない。

衣物をぞろツと引きするやうに著て、どこかだらしない風であつた、それ位が癖といふ程度のものであつた。果物の皮の内側にしやぶりのついたり、梨でも林檎でも心まで噛つてしまふなどは、病人心理の異變風景で、常習的な歪曲された心理の無意識表現ではなかつた。

四 筆 跡

子規の書風は、松山傳來のもので、當時の人は皆略ぼ相似た傾向に在つた。我々の祖父時代に、日下伯巖といふ書に堪能な儒者があつた。東京の泉岳寺の山門に掲げてある額を書いた、大野約庵とか言つた書家もあつた。が、大抵は伯巖系で、子規の書も其の孫位にあたるのであつた。

晩年自分の書に嫌らないで、妙に四角な、墨黒々としたものを書いたこともあるが、永くはつゞかなかつた。史徴墨寶類の古人の手鑑を展げて、秀吉の書簡を譽めたり、大師の筆蹟に傾倒したりしたこともあつた。

歿後約三年、支那龍門山にあるといふ造象銘の小拓本が不折の手に入つた。それが日本に始めて六朝書趣を齎らした最初のものであつた。それまで不折の珍藏して、稀觀の法帖であるとされてゐた王羲之の淳化法帖など、右の拓本に比して、後人の模寫に成るものであることを如實に證明するゝであつた。

其の淳化法帖も一見し、不折の逆筆假筆などといふ筆法をも聞いてゐた子規に、もう三四年早く龍門山を輸入して見せたかつた、と不折と共に残念がつたものである。

子規が果して六朝に歸依したかどうかは判明しない。けれども、秀吉や大師や、世に所謂王羲之王獻士など以外、全然別趣の書體に對して、無感激に看過したとは想像されない。まして況んや、其の後世界一と言はるゝま

で伸展した不折書庫の豊富な諸材料は、單り六朝のみならず、上は秦漢より三代に溯り、下は唐宋明清に降つて、書道の原始状態より變化し發達した、順序と徑路を炳乎として指教するに於てをやだ、それら三千年前の書の神品に接して、何らの感興をも喚ばないといふ、當代の書家先生達と同列な書味低能者であるとは信ぜられぬのだ。

序でに、子規自らの發明であらうと思ふが、或時平假名の書き方に就いて、結構を大きく、ゆつたり、餘裕のあるやうに書けと教へた。例へば、「S」にしても左右の一劃々々の間ゆつたり構へる、「ろ」にしても最終劃の彎曲を十分大きくすると言つた風に、總ての曲り、結びを大まかにすることによつて、書の貧弱味を救ひ得るといふのであつた。紅線は就中字が拙いといふので、筆を持つて散々油をとられたこともある。この教訓は單り假名書きのみならず、總ての書體の上に應用さるべき、永久の金科玉條であると、筆を執る毎に、當時を追憶するのである。

五 遊 戲 氣 分

啓蒙過渡期には、よく方便として、側面的な手段が利用される。其の方が又たよりよく効果を収める場合もある。耶蘇の奇蹟、高僧傳などにある魔術的のものがそれである。

子規も俳句啓蒙の爲めに、可なり饒舌に其の手段を取つてゐる。「ほととぎす」に於ける毎號の課題、試問など、當時綿々として盡きない案出を感歎したものであつた。

が、自己に興味のない、不感性の考案を捏造することは苦痛であり、又た不可能でもある。誌面を賑はす工作であるのは首肯さるゝにしても、子規自身、名案を得て拍案もしないであらうが、何らか快味を感じてゐたことは争はれないと思ふ。

それ以外、子規の「日本」に載せた時事批評の俳句は、社同人の高評を博した。子規の眞似をした私の時事俳句は、何が何だかわからない、もつと俗うけのコツを考へると叱咤した。

すつと以前のことであるが——椎の友連中と句作時代——どうも東京の句には當て込みといふ厭味がある、君らの作は其の點純でいゝと言つたことがある。其の日會合の顔ぶれを見て、彼にこれを掴ましてやらう惡戯的な作を往々試みたのは、却つて子規自身でなかつたかと思ふ。

俳人を青物に見立てゝの「比喻品」は、多分に諷刺の意味があつて、漸く社會的位置の興へられんとする我々に對しての警告であつたが、歌人を忠臣蔵に見立てゝの役割りなどは、會食席上の餘興とは言へ、聊か陳腐など言つてもいゝ駄洒落に類してゐた。

癩癢玉を破裂させる以外、奇矯味も策動臭もない、總てが常識的な正攻法と言つた立て前の上に、新興氣分に乘じた懸命な大局を把握してゐたせいでもあるが、末梢的些事には、往々にして、半ば享樂的な遊戯氣分が仄めいてゐたやうである。烈日嚴霜的に終始しない人間の和らぎ又は餘裕でもあらうが、時にはさまざまと思ふ徒事を興がつたこともある。

それは子規といふ人も、矢張時代人であつたといふ氣がする。明治と言つても、まだ多分に江戸氣分、封建趣味が尾胚骨のやうに残つてゐた、其の無意識の現はれであつたと思ふ。子規の特性でなくて、時代の普遍性であつたのではないであらうか。

六 白 眼

子規の病氣が段々重くなり、さう／＼筆も執れなくなつたので、「日本」では誰か文學方面に新人を入れよう話になつた。編輯では推薦された島崎藤村に話をきめて、たゞ最後に子規の承認を俟つのみとなつた。子規に一度會ひに往つた藤村とは、別に込み入つた話もなかつたやうであるが、後に、子規位冷やかな人は今まで會つたことがない、と藤村が述べたといふ。

この話は又聞きであるから、其の眞偽は保證されないが、世間で有名視する大抵の文士に好感を持つてゐなかつた子規としては、有り得べきことのやうに思はれる。この場合にも、恐らくあの横に切れた白眼がちな瞳が、稻妻のやうに閃めいたことだらうと思ふ。

序でに、子規の眼については、「ほと／＼ぎす」五卷八號に「子規子の塑像」として宮本國手の談話を私が筆記してゐる。それによると子規の眼は鳳眼と言つて、横に切れ方が普通より深く、上脛が圓周の一部を切り取つた單なる弧線でなく、弧線の中央即ち弧線の最高頂部が幾分水平に凹んだ形をした、孔子釋迦などを書く時の眼と同一であるとのことである。

時によつて子規の一瞥が、百萬言にまさる威壓と感ぜられたのも、其の鳳眼のせいであつたのだ。子規の頭も

聰明であつたか知れぬが、眼も亦た其のよき侍者であつたのだ。

奈良の新薬師寺の本尊、一木彫成と言はるゝ薬師如來、其の生ける如き面貌の眼に逢著した時、私は覺えず、子規の眼の再来に驚歎したのだ。

子規の面貌に接せんと欲する人あらば、乞ふ奈良は高畑町に鎮座する新薬師寺に行くべし。

七 財 布

天井から吊り下げた紐——この紐は寝返りの時など力綱にしたものか——に赤黄白の木綿の裂地を三段に縫ひ合せた袋を結びつけてゐた。我輩もこの頃少し小遣ひが出来てな、大いにおごるよ、と例のニーツと鼻に皺よせて笑つた。後にきくと、何でも俳書を抵當にして、歌人の麓から金を借りる約束をしたとのことだつた。我々のやうな素寒貧には、暖にも出さないで、いくらか他人行儀であつた麓にそんなことを打明けねばならなかつた心事を思つて、今に始めぬ我々の不甲斐なさを泣いたものだつた。

が、それも永くはつゞかず、いつの間にか財布もお拂ひ箱になつた。

家計の窮乏も一原因ではあるが、それよりも子規自身、札びらの感觸を手に味ひたかつたのが、主な因由でなかつたか。久しく寝てゐて、金錢の顔を見ない。健康な時は、うるさくなくていゝやうなもの、このまゝ永の別れになるものと、金錢にも惜別の情と言つたやうなものゝ動くのも當然なことだ。借りたといふ金が、僅か拾圓内外——今なら五十圓位にはなるが——で、何の小遣ひぞや。自分で買つて見たい、金錢の手に觸れる氣持は、子供が始めてお小遣ひを貰つて、駄菓子屋へ走ると、さう大差はないのだ。

其の鄙びた財布は、今に根岸庵に残つてゐる。子規は我々に向つて、平氣に嬉しさうな顔をしてゐたが、あの

瘦せた蒼白い手を財布に指し込んだ時の様子が、あり／＼と眼前に浮ぶ。どうもしばらく指先で金をいちつてゐて、容易に取り出さなかつたやうに思ふ。中味は札と銀銅貨取交せていくらある位、はつきりわかつてゐたにも關らず——。

八 芋 阪 團 子

主人が酒に用のない下戸であつたせいでもなからうが、來客へのお茶菓子が切れたといふやうなことは無かつた。それも先づ阪本にあつた岡野といふ菓子屋の煎餅で、卷煎餅、芭蕉の葉の形をした長煎餅などであつた。餅菓子は朝の中でないと賣切れるといふので、さう度々買ひにも出られなかつたらしい。まして、虎屋の羊羹だの、青柳のしぐれなど、上等のお菓子は到來物で見ると位であつた。其の外に、芋阪の搗きぬき團子といふのがあつた。子規庵から西へ三四丁位、谷中へ上る芋阪といふ阪の下に、根岸名物の一つとして、名が聞えてゐた。子規の日記に、この芋阪の團子に就て悶著あり、と書いたのがある。けふは團子を買はうといふのは、どちらかと言へば、幾分ホリデーを意味する位であつた。丁度根岸名物の笹の雪の豆腐、或は上野廣小路の忍川の豆腐をとり寄せるのが、ホリデーの御料理であつたやうに。

團子は五粒づつ串にさしてある。餡をつけたのと、つけ焼きにしたのと二通り。よくどつちがうまい、などと品評したりした。當時の我々は、餡コの方に味方したが、下戸の主人は、却つてつけ焼きに賛成したこともあつた。我々が二本位頂戴する間に、主人はもう空ラ串を三四本も並べてゐた。この團子は、今でも根岸名物として残つてゐる。團子を見るよりも、空ラ串の揃つた方に、當時が餘計追想される。

九子 供

子規庵には子供の縁が薄かつた。僅かにお隣の陸令嬢位のものであつた。「仰臥漫録」に、挿繪まで入れて、朝鮮土産の少女服を巴さんに著せて見せる所が書いてある。其の次ぎにも、「午後オイクサン、巴サン、オシマサン三人來リ西洋の廻燈籠ヲマハシテ遊ブ皆蝦茶ノ袴ナリ」ともある。おいくさんも巴さんもおしまさんも皆陸令嬢で、中にも氣さくな巴さんは姉妹中の花形ともいふべく、大人びたませたことを言つては笑ひの種になつた。虚子の贈つた鴨を、陸の池に放した記事の中にも、この巴さんが出て来る。

子規は子供が好きであつたかどうか、そんなことはどうでもいゝとして、子規庵に無邪氣な朗らかな、理窟張らない明るさを漲らせた巴さんには十分お禮を言つていゝと思ふ。其の頃の巴さんは七、八歳、陸翁は、うちの子供はどうして、どれもこれも子供々々しないのだらう、と言つてたと子規の笑ひ話でもあつた。

自然の天使的看護人、子供の一人でも子規庵にあつたとしたら、とそんなことを思ふ日もあつた。

十選句 殘稿

私が「日本」の選を任せられた時、例の唐紙刷りの原稿紙に、子規の書き留めてゐた、選句殘稿と言つたものが、可なり澤山な嵩で譲られた。

第一行に題を書いて、二行目から句になつてゐる。七八句書いたのもあり一二句書いたのもある。皆子規の直筆なのだ。「日本」への投稿を聞しつゝ、其の入選句を題によつて書き分けたもので、恐らく二三年このかた、いつの間にか左様の嵩になつたものと思はれた。「日本」の俳句欄は、この原稿紙一枚——たしか十八行——に句の充ちた時、新聞に掲載されるのであつたから、これらの殘稿も、子規が健在であれば、追ひ／＼紙上に現はれるべき、未來の希望を持つものなのである。其の殘稿少くも百枚前後を算へたと記憶する。

子規の殘稿に對する敬意と、子規を信頼した投句者への禮儀から言つて、或は無條件に其の殘稿を發表すべきであつたかも知れない。が、子規は曾て前年の俳句界の趨勢を論じて、一昨年より昨年は進歩した、其の證據には、一昨年豫選しておいた句は、昨年其の大半を棄て去らねばならなかつた、といふ風な事を言つてゐた。さすれば、其の殘稿の中には、半ば捨て去らるゝものも混入してゐる。それを全部無條件に發表することは、故人に對する儀禮の爲めに、藝術の權威を損ふ結果を生ずる。殊に紙上掲載の際、一々子規殘稿の一部である旨を明記す

る事も出来ない。つまりは後任選者たる者の全責任に歸する外はないのである。

私は子規の豫選を再選する僭越を心に詫びつゝ、紙上掲載に臨んでは、殘稿の中を涉獵して、極めて少數の句を摘採した。若し私が突如瞑目して、地下に子規に會うたとしても、殘稿の處置について、愚見を披瀝するに躊躇しない用意を持ちつゝ――。

この殘稿の大部分は、其の後卅九年八月、私が全國行脚に出發する前、「日本」の後任選者となつた虚子に、前例を守つて、其の全部を提供した。選者交代の事務引継ぎの唯一の行事であつたのである。

昭和十九年六月一日 初版印刷
昭和十九年六月十日 初版發行

(五〇〇部)

子規の回想

定價金 七圓五拾錢
特別行爲税相當額卅錢
合計金 七圓八拾錢

作者
行者
配給元

河 東 碧 梧 桐

西 谷 操

東京都神田區西神田一ノ九

昭文堂 佐 藤 磨

東京都小石川區柳町二十六

東京(四七)

日本出版配給株式會社

發行所 東京都神田區西神田一ノ九

昭南書房

會員書號二二三六八

(出版會承認)
No. 150694 等



24 P-90

終